Apexの能力貰ったけどこの世界じゃ通用せんだろ、それよりﾓｻﾞﾝﾋﾞｰｸﾋｱｧ

ナメクジとカタツムリは絶対認めない

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハイスクールＤ×Ｄの世界で、Ａｐｅｘのレジェンド達の能力を受け継いだ主人公が、必死に生きていく物語です。

目次

二度目の高校生 ―― 1
運命は突然に ―― 4
『アドレナリン中毒者』の力 ―― 10
デートアドバイザー ―― 18
ハンターの教え ―― 25
ありえてはいけない事実（殺意） ―― 31
夜の攻防 ―― 38
デート…？ ―― 45
聖女 ―― 51
再会 ―― 56
オカルト研究部 ―― 61
煙とトランポリンとデコイ ―― 67
１４人目 ―― 75
聖女と友達 ―― 81

二度目の高校生

転生しました。
前世の俺の死因は――トラックにガツン！らしい。なんともあっけない最後だ。別に轢かれそうになった子供を助けたとか、そういうのじゃない。――まあ、それで、気づいたら赤ん坊になってた。そっからなんやかんやあって、今。駒王学園に通うぴちぴちの高校二年生になってる。
「おーい！操！」
早朝の静かな住宅街に、大きな声が響く。その声の主は、手を振りながらこちらに走ってこようとしていた。
「おお、イッセー。あれ？今日は覗きに行かねえの？」
「今日は女子剣道部は朝練無いからな！」
さらっと女子剣道部のスケジュールを何故か知っているこの男。ウチの学校の有名人の一人、『兵藤一誠』は、俺の肩を組みながら自身の鞄の中を見せる。そこには、さまざまなジャンルの――
「…お前またエロ本持って来てんの？そろそろバレるぞ先生に」
「だーいじょぶ大丈夫！没収されてもまだまだあるぜ！」
「そうじゃなくて」
根本的な面で話が噛み合ってない友人につい頭が痛くなる。こいつは顔は良いんだけどな…どうしても中身が変態魔神すぎてモテない。
「おっと、こうしちゃいられねえ！松田と元浜とコレクションの見せ合いをするんだった！へへ、じゃーな！操！」
そう言って、イッセーは走り去っていった。…あ、なんか通り過ぎた女子高生に悲鳴あげられてるんだけど。他校にまで知れ渡ってんのかよ、あいつの名前。

［とか言って、なんだかんだアイツの事放っておいてねえじゃねーか！分かるぜ、お前ツンデレってやつだろ!?］

突然、頭の中に男の声が響く。その音量はまだ完全に覚醒していない脳に酷い痛みを起こすのには十分な大きさであった。俺はつい頭を押さえた。

「うっせーぞ、オクタビオ…！朝からそんな大声出してんじゃねぇよ…」

俺は頭の中の声に悪態をつく。すると、次々と声が発言をしていく。

［元気がねえなあソウ！ちゃんと飯食ってんのか!?眠気覚ましに、いっちょ走ってみるかい？］

［それは昨日遅くまでうちらの能力の練習をしてたからでしょうが、シルバ！大丈夫よ、ソウ！うちのヘルスドローンで――］

［いやいや！ライフライン、君の能力は少々目立ちすぎてる。ここは、僕たちがソウを言葉で元気にするんだ！大丈夫、博士から人を元気付ける言葉を内蔵されてるからね！まずは――］

［ソウ！頭痛には面白い話で痛みを和らげるのが一番だぜ？しょうがない、このミラージュ様が一つ面白い話をしてやるよ！］

「があ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”うるせぇぇぇぇ!!!てめーら全

員静かにしやがれえええ!!!」

俺の事を怪訝そうな顔で見る通行人には目もくれず、俺――『阿久須（あくす）　操（そう）』は、頭の中の住人たちに怒りの叫びを上げるのであった。

運命は突然に

駒王学園にて昼休み。俺は売店で購入したサンドイッチを頬張りながら、目の前でエロ本を並べる悪友三人を眺めていた。
「…おい、なんで俺の机でエロ本観賞会してんだ、ぶっ飛ばすぞマジで」
「皆まで言うな、操。お前も混ざりたいんだろ？しょーがない、俺たちのとっておきを見せてやるよ！」
「ったく、素直じゃねえなあ…。人妻、ロリ、幼馴染、上司、家庭教師。――さあ、選べ」
「頭沸いてんの？ねえ、頭沸いてるよね？ああやめろ出すな出すな机の上に追加するな周りの目が痛い!!」
どさどさと目の前に積まれるエロ本の山を見た女子生徒が俺たちから離れて行くのが分かる。違うんです。こいつらなんですよ。
そしてそれだけじゃ被害は収まらず――。

[――ッ、全く、ソウの友達には困ったものね、イキナリそんなものを出すだなんて、困ったものだわ！]
[虫ケラ共、よく私の目の前でミス・パケットにそんな物を見せたな。その度胸だけは認めてやる。度胸だけは、な]
[おいみんな！コースティックがヤベェ！おさえろおさえろ！]

俺の頭の中でコースティック――『ノックス』がブチ切れてんですよねー。ワットソン――『ナタリー』が俺の視覚を通じてエロ本見てしまってパニック状態になってるから。一見冷静に対処してるように思えて実は絶対顔が真っ赤に――、

[――ソウ？痺れ殺すわよ]

あっ、すいませんでした。

あのままあそこに居てはいけないと思った俺は、とりあえず教室を出る事にした。授業が始まるまでそこら辺をぶらぶらしとけば何とかなるだろ。

…あ、もう大丈夫だぞ、みんな。ありがとう。

［ハア…ハア…こ、こいつ…めっちゃ力つよ…！］

［うちらが全員しがみついても暴れるのを辞めないって…どーいう体力してんのよ？アンタ何歳？］

［…くそ…なんで俺がこんな事を…］

［…ははっ！ず…随分とグロッキーじゃねーか、クリプト！ハア…ふう…］

［私のミス・パケットを心配する気持ちが、私に力を与えたのだ］

［メルシー、博士！やっぱり貴方はいい人ね！］

ワーイイハナシダナー。…マジでお疲れ様でした。

心の中でレジェンド達に礼を言った俺は、ふとすぐそばの教室の中を覗く。ざわざわと騒めくクラスの中心に、その少女はいた。

色白な肌。整った、可愛い系の顔をしている、純白のショートカットの小柄な少女――『塔城　小猫』がそこに無表情で佇んでいた。

彼女はこの駒王学園のマスコット的な存在で、いつも甘いものをもそもそと食べている。その姿が一部の男子や、女子に人気らしい。

「…！」

あ、俺に気づいた。ま、ここは無難に会釈で返しときますかね。

俺はぺこり、と頭を下げ、そのまま自分のクラスへと帰ろうと踵を返した。

…あれ、体が動かねえ。ち、ちょっと待って？なんか誰かに掴まれてる気が――――、
「…なんで行っちゃうんですか」
後ろを振り向くと、いつの間にか俺の服の裾を摘んでいる塔城が、こちらを睨んでいた。…ええ？俺こんな子のひとつまみで動けなくなってんの？どんだけ貧弱なんだよ。
「あー…いや、ほら、なんか忙しそうだったし…」
「全然忙しくなんかないです。むしろ暇だったので…先輩オススメのスイーツ屋さん、また教えてくれませんか？」
「ああ、分かった」
「……」
「…塔城？」
「はい？」
「離してくんね？」
「…や、です」
上目遣いでこちらをじっと見つめる塔城。それを見ていると、やはり整った顔をしていると再認識できる。
ふと、我に帰り、周りを見てみると中々の人だかりができていた。
「あの塔城さんがあんなに喋ってる…!?」
「つーか誰だあの先輩？…あ！『三変態の付属品』、阿久須操か!?」
「ちょっと待て俺そんな風に呼ばれてんの？」
さらっと無視できない新事実を述べられた俺はその男子生徒を問い詰めようとする。そして首に食い込んだ襟元に呼吸を阻害される。忘れてた。俺今捕まってたんだった。
「…ちょっとは私を見て下さいよ」
「あ？何？」
「なんでもないです」
「なんだあれ…爆発しろよ」
「俺たちの小猫ちゃんによくもあんな事を…！」
「処す？処す？あいつ処す？」

ヤバい奴らが集まってきた。そういう系の男子が俺に近づいて来る。俺はとりあえずこの状況から脱するため、塔城の小さな手を握る。
「あ…」
「悪い、塔城！スイーツはまた今度！」
その指を一本ずつ外して、俺は自身の教室へと走って行くのであった。

［あらあら、ソウったら。やっぱり盗みの才能はあるみたいね？あの子、顔赤くなってるじゃない］
［ま、これは俺様たちがいちいち言うことでも無いからな、ソウ自身が気付くことだ］
［うーん、僕らは機械だから、あんまり人の気持ちは分からないなあ、ね？お兄ちゃん］
［私は元は人間だぞ……。あとお兄ちゃんと呼ぶな、私にはレヴナントという名前が――］

そんな事もあって放課後。俺と三変態は帰路についていた。
「やっぱりおっぱいは最高だよな！」
「…ああ」
「？どうしたんだよ松田。そんな神妙な顔をして」
「――俺、最近尻も良いなって思い始めたんだ」
「な――」
「――お前、分かってるのか？裏切りは重罪なんだぞ――？」

「――それでも、俺たちは自分自身に嘘を吐きたくない…！だよな、操？」
「しらねえよ」
そうやって、いつもみたいに馬鹿騒ぎして楽しく帰る。すると、俺たちの目の前に、黒髪ロングの可憐な少女が見えた。それに気づいた三人は、即座に佇まいを直す。
「あ…あの！」
その少女は俺たちに声をかける。それにいち早く反応したのはエロメガネこと元浜だった。メガネをクイクイ上げながら少女の前へと躍り出た。
「どうしたんだい？僕に何か用かな？あ、そうだ。ここで立ち話もアレだから、近くのカフェにでも寄ろうか？」
誰だお前は。どっからそんな爽やかボイスが出てきたんだよ。
「あ…あの、ごめんなさい…貴方じゃなくて…」
「ガハァッ!!」
元浜ァーーーッ!?吐血した!?嘘だろオイ！
俺は倒れた元浜へと駆け寄る。そこには安らかな表情で眠っているメガネが居た。…良かった、メガネは無事だ。
「え、えっと…ひ、兵藤一誠さん！」
「えッ!?俺!?」
松田が喋らせても貰えなかったから真っ白になってる!?オイしっかりしろ松田！
「私と…お付き合いしてください!!」

傷は浅いぞ松田！元浜も早く戻って――――――、

「「は？」」

「よー・よろしくお願いしまァす!!」

「「は？（殺意）」」

…どうやら、俺の友達に彼女ができたみたいです。

『アドレナリン中毒者』の力

「あいつに彼女とはなあ…」
日課の夜の駒王町のランニングをしながら俺はそう呟く。結局、あの後、イッセーの彼女になった――『天野　夕麻』さんは、幸せそうな表情を見せ、イッセーと一緒に帰って行った。
…まあ、あの時の俺はちょっとだけ戸惑ってしまったが、冷静に考えてみればイッセーに彼女ができるのは当然だと思う。あいつはいつもはエロいことばっか言ってるけど、多分彼女とか出来たらその人をずっと愛するタイプだ。顔も良いしな。むしろ遅すぎたくらいだったな。
［ベタ褒めじゃねーか、ブラザー？］
ジブラルタルの兄貴が俺をからかう口ぶりで話しかけてくる。
「俺の友達なんだ、当然だよ、兄貴」
そう言うと、兄貴はヒュウ、と口笛を吹いた。心なしか、他のレジェンド達からも、暖かい空気が感じられた。
その空気に耐えられなくなった俺は照れた気持ちを隠すために、さらに走る速度を上げるのであった。

「ふう…」
［良い走りだったぜ、ソウ］
町中を走り回り、近くの公園で水分をとる俺を労ってくれるオクタビオ。なかなかキツかったな…、毎日続けているとはいえ、全力疾走というのは流石に疲れる。
なんで走ってるのかというと、それは今教えられている『能力』に

関係している。オクタビオの『能力』――。それを使いこなすには、とにかく体力がいるらしい。

［良いか!?俺の能力があればどんなレースだって一位になれる！だからその時のためにメチャクチャ走れ！］

――こんな端的な説明で何をすればいいか分かった俺を誰か褒めて下さい。…まあ、こいつらは結構冗談とかは言うけど俺に嘘は絶対に吐かないからな。そこんところは信頼できるんだけど――――、

――オイ！今すぐそこから離れろ！危ねえぞ!!――

「…ん？」

［どうした、ソウ？］

「ん？あ、いや、なんか声が聞こえたんだ…『危ない、離れろ』って…」

［…！――ソウ!!今すぐそこから逃げて!!］

突然レイスが叫ぶ。いつも冷静な彼女がなぜこんなにも取り乱しているのか。困惑していると、突如上から声をかけられた。

「――こんなところに『神器』を所有する人間がいるとはな。下等な種族にしては珍しい者も居たものだ」

その男は背中から黒い翼を羽ばたかせながら、俺を見つめてくる。その目は、例えるなら――自分の周りを飛び回る鬱陶しい羽虫に向けるような視線であった。
感じたこともない威圧感に思わず脚が震える。そして、その男は何やら光を放つ槍を手に発現させる。
…アレ？これ、やばいんじゃ――――。

「邪魔をされると困るのでな。俺に運悪く見つかったことを悔やむが良い」

［ソウッ！走れッ!!］

頭の中で突然オクタビオの大きな声が響く。反射的に俺の体は公園の出口へと走っていく。それと同時に、男が手に持っていた光の槍をこちらに向け、投擲したのが分かった。
光の槍は地面に着弾する。直撃を受けた地面はクレーターができていた。もし俺が動かなかったらと思うと、背筋が凍る。

「うあ…っ！なんだよアレ!?冗談じゃねぇぞ…!?」

俺は必死に走りながら状況を確認しようとする。が、パニックになった頭では上手く考えがまとまらない。そうしていると――、
［狼狽えるな、ソウ。今はとにかく逃げろ。死んでは元も子もないぞ］
ブロスの冷静な声が、俺の心に落ち着きをくれようとする。しかし――

――光の槍がまた降ってくる！今度は三発！――――

謎の声が俺の落ち着きそうになった心をかき乱す。

「なんだこの声…ッ!?」

［ソウ、それは貴方の味方。その声に身を委ねて！］

「はあ!?」

レイスが奇妙な事を言い出したその時、後ろから光の槍が三発俺に向かってきた。

「おおおおッ!?」

訳も分からず、それをどうにか避けようとするが、着弾した際に飛んできた地面の欠片によって腕に切り傷ができる。

その痛みにより、一瞬足を止めてしまう。それはつまり、あの男に追いつかれるという事で――。

「手間をかけさせてくれたな…、これで終わりだ」

俺の正面に降り立った男が、俺に槍を投げようとする。しかも五発。その事実に絶望を感じた俺が、必死に策を練ろうとしたその時――。

［しょうがねぇ…おいソウ！ぶっつけ本番でやってみるぞ！］

「はあ!?何を!?」

［『能力』だよ！大丈夫、心配するな！走る事なら――俺の独壇場だぜ］

そのオクタビオの言葉と同時に、突然俺の頭にイメージが湧く。
［それは俺の『能力』のトリガーだ！そいつを強く念じろ！そうすりゃ手元に来るさ！］
言われるがまま、そのイメージを強く意識する。すると、いつの間にか右掌に、緑色の液体が入った注射器が現れていた。
「――なんだそれは？それが貴様の神器か。ハッ！どんなものかと思えば――、弱そうな物だな」
「おいオクタビオ！こ、これ刺すの!?大丈夫？これヤバい薬じゃねえの!?」
なんとなく緑の液体を注射するのに抵抗がある。しかし、レジェンド達は俺に嘘は絶対に吐かない。腹を括り、俺はイメージにあったように、左胸に注射器を――打ち込んだ。

ドクン。

液体が体の中に流れ込むのが分かる。そして、それが全身に染み渡る感覚の後、そこにあったのは奇妙な昂揚感であった。
「な…なんだコレ…なんか急に、テンション上がってきた…！」
命の危機が迫っているというのに、俺の感情には『恐怖』の二文字は無かった。すると、オクタビオの声がまた聞こえる。
［何してんだ！走れ走れ！思いっきりな!!］
俺はその言葉に頷き、そしてまた地面を蹴り上げ、男から逃げる。なんとなく――なんとなくだけど、今の俺なら『イケる』。そんな感情と共に、俺は走り出した。

「――なんだと」

走り出してすぐに、男の声が小さく聞こえた。俺はそれに違和感を感じ、後ろを向く。そして驚愕する。何故なら――今まで、十メートル程距離を取っていた男との距離が、今の一瞬で三十メートル以上離れていたのだったから。

「は…速…！俺速ァッ!?」

再びオクタビオの声が頭に響く。

［俺の『能力』の一つ、『アドレナリン興奮剤』――。それを打ったならソウ、お前は誰よりも速くなる！］

町を駆ける。走り出してどれほど経ったのだろうか。後ろを見ても男の姿は見えない。どうやら振り切った様だった。それを確認したと同時に、立ち止まって深呼吸をする。

そして、容器の中身が全て無くなった後――突如体にズキン、と痛みが走った。

「い”…ッ!?」

それに堪らず蹲ってしまう。そのまま痛みに耐えていると、またオクタビオから声がかかった。

［ソウ、安心しろよ。じきに痛みは無くなる。俺の能力の二つ目はな、自動で自分の体を回復できるんだよ！スゲーだろ！］

「ああ…そーなの」
なるほど、確かに痛みが徐々に引いていくのが分かる。それに、腕にできた切り傷もいつの間にか無くなっていた。…便利だな、これ。
――そして、完全に痛みが無くなったのを確認して、俺は立ち上がった。

「みんな、ありがとな。みんなが居なかったらヤバかった」
［おーう！ソウのためなら当然さ！］
［アンタは全く働いてなかっただろ、おっさん］
［ハイハイ！喧嘩はやめな、鬱陶しい。――ソウ、良く頑張ったわね。ナイスだわ！］
［奴らの目的はなんだ…？まず、奴らは何者なんだ…？］
［私たちに喧嘩を売ったことを、後悔させてやるぞ…！］
［ねえ、オクタン、私のジャンプドライブの方が良かったんじゃないかしら？］
［う…！い、嫌、アレは俺のじゃないと駄目だった！…気が、する］
［ガッハッハ！まあいいじゃねーかブラザー。ソウが無事だったんだ、それで良いだろ？］
［ね…ねえ、大丈夫、ソウ？本当に痛いところは無いのね？もしあったら、私の電気を使うと良いわ！そもそも、電気というのは昔から医療に――］
［お疲れ様、ソウ。確か冷蔵庫にケーキがあったよ！後で食べるといい］
［主神に感謝しなさい、ソウ］
［私も能力を伝えてなかったのが悪かったわ。――ごめんなさい、ソウ］
［まだまだ訓練が足りてないわ、これからも精進しなさい］

「あー…ははっ、――やっぱりうるせぇぇぇぇッ!!」
夜の町に、俺の悲痛な声が響くのであった。

デートアドバイザー

「…眠い」

あの後、俺は家に無事帰れたんだが――あの注射、どうやらアドレナリンを活性化させるものらしく、薬が完全に抜けきってなかったらしい。それで家に帰っても目がギンギンに冴えてしまい、一睡も出来なかった。

「ようー・そ…そ、操!?お前大丈夫か!?死にかけのコオロギみたいな顔してんぞ!?」

「――ようイッセー、今日も元気だな…彼女ができたからか?畜生俺も彼女欲しい」

「本当にどうした!?いつものお前ならそんな事言わねえだろ!?」

元気という元気が無くなった俺の肩を揺さぶるイッセー。心配をしてくれるのはありがたいが、今の俺は超疲れてる。今日は一人で学校に向かわせてもらおう。

「あー、大丈夫だから。お前は先行っといてくれ」

「お、おお…そうか?無理すんなよ?」

そう言うと、イッセーは俺が疲れていることを汲み取ってくれたのか、心配そうにこちらを何度も振り返りながら、学校へと向かって行った。

…悪い事をしたな、後で何か奢ってやるか。

「あの坊やにはエロ本で十分だろ?」

「兄貴、それは俺が社会的に死んじまうよ」

頭の中で豪快な笑い声が響く。だから眠いんだから静かにしといてくれ兄貴。俺はそう心の中でそう呟き、学校へと向かうのであった。

「頼む操！俺にデートのノウハウを教えてくれ！」
昼休憩。俺はイッセーに頭を下げられていた。こいつの話によると、今日の放課後、彼女とデートらしい。しかし、彼女というものを作った事も無い万年発情期の自分に、純情なデートのプランが考えられる筈がない。故に、俺に相談してきたというわけなのだが――。
「…いいかイッセー。良く聞け。俺に彼女はいない」
イッセーの背後にはすでに死体となった松田と元浜の姿が。待ってろ今俺もそっちに行く。死ぬ時は一緒さ。
「イヤイヤイヤイヤ！待ってくれよ！本当にこっちは相談してんだって！」
ふらふらと松田と元浜に近づこうとする俺を必死に引き止めようとするイッセー。ええい離せぃ。所詮リア充にはわからんだろうな、この胸の痛みは。
「頼むって！…人生初の彼女なんだ、初めてのデートは満足させたいんだよ…」
「…」
そう言うイッセーの目は本気だった。いつもの不埒な事を考えている目ではない、彼女を想いやる決意をした目だった。…はあ。
「…俺は分からん。…まあ、一応知り合いに聞いてみてやるよ」
「――ッ！ありがとう！」
[…随分と甘いんだな、ソウ]
こいつはいっつも、俺が手助けしないとすぐにすっ転んじまうからな。ちょっとだけのおせっかいってやつだ。
…さて。そうと決まれば、早速行動しますかね。

「小猫ちゃん！このお菓子美味しいよ！食べてみない!?」
「…ありがとうございます」
　私の机の上に、さまざまなお菓子が並べられる。…この人達は、いくら私が甘い物が好きだからって、こんなに食べれるって思ってるんでしょうか？…まあもったいないんで食べますけど。
　もきゅもきゅと貰ったお菓子を咀嚼していると、周囲の生徒の声が聞こえてくる。
「やっぱり可愛いよなぁ～！小猫ちゃん！」
「流石はこの学園のマスコットなだけはあるぜ！」
「あんなに頬いっぱいにお菓子詰めてて…抱きしめたいわ！」
　…はぁ。なんなんでしょうか、一体。人がお菓子を食べてる時に…。まあ、私は人じゃないんですけどね。
　それにしても、「抱きしめたい」…か…。あの人はそう思ってくれたことはあるんだろうか。
「…う」
　いやまあ、やっぱり私も女ですから意中の人にはぎゅっと抱きしめてもらいたい訳で。…あの時、私の事を救ってくれた、ちょっと頼りなさげな顔つきの、あの人に。
「…城」
　…大体、なんで私の好意に気づかないんでしょうか？いっつもいっつも私がスイーツ店に誘ってるのに、あっちはスイーツに夢中で全然私の事とか気にしてないし！せっかく可愛い服着てきたりとかしてるのに！…もういいです、次に出かけた時は意地でも気づかせてあげます！
「塔城！」

「ふえっ!?」

突如聞こえた声に体が反応してしまう。その声は、今私が思い浮かべていた人物と同じもので――。

「あ、阿久須先輩?!」

「お、おう…どうしたそんな大声出して…」

予想だにしない展開に顔が熱くなるのを感じる。それもそうだろう。今まで想っていた私の好意を抱いている人は、この人なんだから。当たり前だが、心の声は人には聞こえない。しかし、私の顔はどうにも熱さを逃すことはできなかった。

「い、いえ…何でもないです。それより、急にどうしたんですか?」

私は突然先輩が、突然ここに訪ねてきた理由を問う。――まあ、おそらくスイーツ店の話でしょうけど。先輩は甘党ですからね。どーせ、私個人なんかに用なんか――、

「デートに行くとしたら、どこに行きたい?」

「――――????」

その俺の問いかけに、目の前に居る塔城は動きを止める。そして、感情が無くなった表情で俺を見る。…どうしたんだよ、マジで。

「で…デート……?」

「そう、デート」

その言葉を噛みしめるように何回も呟く塔城。めっちゃ怖いんだが。
しばらくその動作をしていたが、急にその端正な顔が赤に染まっていく。
「ふえっ、えっ!?ちょ、え、デート!?デートって、あのデート!?」
「お、おう…だからさっきから言ってんだろ?――で、どうなんだよ。答えてくれ」
そう言うと、しばらくわたわたとしていた塔城だったが、小さな声でぽつぽつと口を開いた。
「…わ、私だったら、どこかショッピングモールとかで買い物して、それで甘いものとか食べさせあいこしたり…したいです」
…なるほどな。つまり女子からしたらそれが理想的なデートってわけか。よし、データは取れた。早速イッセーの所に戻ろう。
「オッケー、ありがとな塔城。今度なんか奢るよ」
「…はい!」
何故か目がキラキラしている塔城に礼を言った俺は、その場を足早に立ち去っていった。
「あ、あの小猫ちゃんがあんなに表情豊かに…!?何者だアイツ!?」
「う、嘘でしょ…私の小猫ちゃんが…ッ!」
「アイツの名を教えろ…俺が消しとばしてやる…!」
「――にへへ、先輩とデート…!楽しみだな…」

放課後。塔城にアドバイスを貰ったあの後、俺はイッセーへと情報を伝えた。イッセーは号泣しながら何度も礼を言ってきたが――、大丈夫だろうか。絶対にアイツの彼女がそのデートプランで喜ぶとは限らないからな。心配だが…まあ何とかなるだろ。

［ソウ…他人の心配も良いが、まずは自分の事も考えろ。昨日のこと、忘れてはないだろうな？］

ブロスが俺に警告する。…そうだ。イッセーに気を取られすぎて、俺の事がすっかり疎かになっちまってた。

――あの男、何だったのか。人間では無いのは確かだ。翼も生えてたし、なんなら光の槍みたいなのを飛ばしてきたしな。あの時は逃げ切れたけど、今度は分からない。最初から本気で来られたらいくら『興奮剤』でも逃げ切れるかどうか…。

あの男の事を考えるとネガティブな発想しか出てこない。…はあ。イッセー達に相談してもなあ。どーせバカにされるだけだろうし。

［…しょうがないか。――ソウ、今から私の『能力』を君に一部分だけ渡す］

…え？ブロスもオクタビオみたいな『能力』持ってんの？

［当たり前だ、ここに居る全員は持っているぞ？…まあそんな事は今はいい。――いいか、イメージを今から送る…が、これを使いこなすのはそう難しい事ではない。大事なのは、自然に身を委ねる事だ］

そうブロスが言ったと同時に、俺の頭に『能力』のイメージが浮か

び上がる。その『能力』は、オクタビオのものとはまるで違う物で――。

［――『全能の目』――。それは主神の力だ。敬意を表せ、ソウ］

ブロスに新しい『能力』を与えられた翌日、俺は寝不足になる事もなく、清々しい朝を迎えていた。親が作ってくれた朝飯を食べ、制服に着替えて登校する。

少し早めに家を出たおかげか、いつもより早めに学校へと着いた。席につき、ホームルームが始まるのを待っていると、教室の扉が豪快に開かれる。そして、荒々しくイッセーがこちらへ向かってきた。

…そうだ、デートはどうなったんだろうか、成功か？こんなに元気なんだからな。ま、お祝いにどっかに連れてって――――、

「――なあ、操。答えてくれ。夕麻ちゃんの事、覚えてるよな!?」

なぁにを言ってるんでしょうかねコイツは？

ハンターの教え

「な、なあ…操…！頼む、答えてくれよ…！俺の彼女――夕麻ちゃんの事覚えてるよな!?」

目の前で必死の形相をして掴みかかってくるイッセーに俺は動揺する。…何言ってんだコイツ？彼女がいない俺への当て付け――いや、違うな。冗談の類だったら、コイツがこんなにも何かに縋るような表情が出来るわけない。

「…何があった？」

とりあえず、状況を整理するために俺はイッセーの話を聞くのであった。

「みんなが夕麻さんを覚えてない？」

イッセーから伝えられた事情。それは、先日イッセーの彼女になった夕麻さんの事を、誰も覚えてないという現象であった。

今朝松田と元浜に夕麻さんの事を話したところ、二人は夕麻さんの存在すら分からなかったという。

「…でも、操は夕麻ちゃんの事を覚えてるんだよな？」

「ああ。ばっちり覚えてるぞ。あの時のお前に対する殺意は過去最大だったからな」

「殺意!?俺殺意向けられてたの!?」

騒ぐイッセーを見て俺は少し息を吐く。いつも変態的な発言をしてるとは言え、今のイッセーは精神的に不安定だ。ま、今みたいに笑えるならまだ大丈夫か…。

「とりあえず、今日は大人しくしとけ。俺も一応人に聞いてみるから」

「あ、ああ…ありがとな、操」

そんなこんなで放課後。俺は家へと帰り、日課のランニングをする。あの男が怖いが、やっぱり日々の鍛錬が大事だからな。それに、試したい事もある。

俺はいつものランニングルートではなく、住宅街を見下ろせる高台へと向かって行く。そこで息を整え、大きく深呼吸をする。そして――。

「――『全能の目』」

静かに、俺は能力を解き放った。

「『全能の目』？なんだよそれ」

――時は、俺がブロスに『能力』を与えられた後まで遡る。…そんな急に自然に敬意を払えやら、主神やら…なんか胡散臭いぞ、ブロス。

［一言で言えば、”捜索能力”だ］

「捜索…？」

［ああ。お前が探したいと設定したもの全てを見通す事が出来る］

設定したもの全てを見れるって…そう言われても、何が何やら分からない。急に捜索とか言われてもイメージが沸かない。

［…そこに休める場所はあるか？］

「あ？ああ…ベンチがあるけど…」

［そこへ行け。私が使い方を教えてやる］

その指示通りに、近くの公園のベンチに座った。公園では、小学生くらいの子たちがボールで遊んでいる。俺と同学年の高校生は一人

もおらず、すこし羞恥心が生まれた。
「おい、座ったぞ…こっからどーすんだよ」
［よし、では始めるぞ。まずは、どのくらいの『範囲』で、『何』を探すのかをしっかりイメージしろ。今回は…そうだな、『この公園の範囲内の人数』をイメージするんだ］
またイメージかよ…、えっと、範囲を公園…人の数をイメージ…？どーするんだ…？
［公園の中にいる人数と強く思えばいい。さあ、私に続けて言葉を発しろ…。『主神が眼力を与えたもう』］
「は…？あ、主神が眼力を与えたもう」
［もっと心を込めろッ!!ふざけているのかソウッ!!］
「うえええ!?急にどうしたんだお前!?」
急にキレ始めたブロスに辟易としていると、俺の視界に変化が訪れた。ベンチに座っていた俺を中心に、オレンジ色のレーダーがドーム状に広がって行く。
「お…!?おおおお!?何だ!?」
そして、そのオレンジ色のレーダーに公園内にいた人物に、ピンのようなものが付けられる。しかし、その変化に誰も気づいていない。これは能力を使った俺にしか見えないものなのだろう。さらに、建物などの障害物で見えなかった人物も、その建物越しに見えるようになった。
その視界の急な変化に思わず声を上げてしまう。
［フーッ、フーッ…！――これが私の能力……！分かったか？他の物を探したい時もそれを強く思えば探せることが可能だ…！］
鼻息が荒いブロスの発言に、思わず笑いが出る。なんだよそれ、チートじゃねえか。つまり何でも探せられる万能能力って事だろ？これは日常で一番役立つんじゃ――、
「ねーねー、さっきのおれんじいろのひかりなんだったんだろーね？」
「…え？」

遊んでいた子供が放ったその言葉に唖然としてしまう。アレ？ピンとか見えないんじゃなかったっけ？するとブロスから補足が入った。

［目標を特定したマークは視認はできない…が、オレンジ色のレーダーは発見される。使い所を間違えると大変なことになるぞ］

なるほど…レーダーを使うところはしっかり見られるわけか。これは普段の生活じゃあ使えないなぁ。

そう落胆していると、ふと、視界がぼやけていくのを感じた。

「お？」

じんわりとした痛みとともに、両目からは涙がポロポロと流れ出る。突如襲ってきた目への異常に困惑していると、冷静を取り戻したブロスの声が頭に響いた。

［副作用だな。一時的に視力が落ちる。範囲によっては視力が回復する時間がより必要となる――注意しろ］

「範囲は――『駒王町』。対象は、『天野夕麻』」

そう呟いた途端、俺を中心にオレンジ色のレーダーが広がり、駒王町を囲んで行く。…レーダーは他人に見えるって言うけど、一瞬だけだから勘弁してくれ駒王町のみんな。

しばらくそのレーダーが広がった後、まるで空気に消えるかのように霧散して行く。…これって…。

「居ないのか…？この町に…」

おかしい。急に居なくなる事なんてあるか？引越したにしても、せめて彼氏のイッセーには伝える筈だろ…。

何故知らせなかったのか。それを考えているうちに、視界が霞んで

行く。副作用だ。しかし、以前に使った時より範囲を広くした為か、その代償はさらに大きくなっていた。

「――あ゛、っ痛!!」

針で刺された様な鋭い痛みが眼球を襲う。公園の時とは比べものにならないほどの激痛で目も開けられない。思わずその場に蹲ってしまう。

［ソウ!大丈夫か!?］

「あ、ああ…いや、痛え…!」

［全く…!何故急にこんな無茶をした!?町一つ分の範囲なんて――］

…しょうがないだろ、あのバカのイッセーが必死になって自分の彼女探してんだ。アイツの初めての大事な彼女さんなんだ。俺も本気で探さねえと、友達失格になっちまうからな…。

［……］

つーか、本当に夕麻さんはどこに消えちまったんだ…?引っかかる所なんか一つも――、

《こんなところに『神器』を所有する人間がいるとはな》

……いや、まさかな。

頭に一瞬よぎった嫌な結論を、俺は首を振って追い出すのだった。

次の日。学校へと到着した俺は、いつも通り自分の席へと着く。…あの後、目の痛みが激しすぎて帰るのに一時間くらいかかってしまった。母さんが鬼の様に怒ってたな。…もう『全能の目』使うのやめとくか。

…ん？なんか周りが騒がしいんだけど。全員窓から体乗り出してる…オイオイ元浜と松田!?口から魂みたいなもんが出てんぞ!?おい戻ってこい！一体何見たらこうなるんだよ!?

焦りながらこの混沌を作り出したその原因を睨む。そこにいたのは――、

我が校のアイドル、『リアス・グレモリー』と仲睦まじげに登校する、我が校の変態、兵藤一誠がそこに居たのだった。

ありえてはいけない事実（殺意）

リアス・グレモリー。…この駒王学園の『二大お姉様』の一人。容姿端麗、成績優秀。その才能は教員にも認められており、また、誰からも尊敬される立派な性格。どこを取っても不足はない彼女のその艶やかな紅髪を靡かせ、悠々と歩く姿はまさに『お姉様』。…なんだが……！

何でイッセーがそのグレモリー先輩と一緒に登校してるんですかねえ!?

おかしくない!?必死に俺はアイツの彼女を探してやってんのに、当の本人はなんであんな美人と仲良くなってんの!?

何で？（疑問）何で!?（殺意）

［落ち着いてソウ!?危ない思考に入り込んでるわ！］

［うわーお！男の嫉妬は見苦しいぜ？ま、そうなるのもしょうがないか！女の味も分からん様なお子ちゃまにはな！］

ウィットォ!!お前絶対殺す！もう…なんか…こう、殺すッ!!

［そこまでにしときな。ソウ、あんた今すごい顔してるよ？落ち着いて…落ち着いて…リラックスするのよ……］

あ…ああ分かった、よし。はい深呼吸～！ゆっくり息を吸って～！吐いて～。教室のドアが開いて、そこからゴミクソ○○○○野郎が来たけど気にしなーい、気にしなーい！

「ようお前ら、生乳…見たことあるか？」

僕を覚えておいて？君を殺すことになるかもしれない、阿久須操だ！

［ソウ!?］

「さあ詳しく聞かせてもらおうかイッセー君と言うか意地でも聞かせてもらうから覚悟しろやこの野郎」
「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」
松田と元浜の怨嗟が凄い。今にもイッセーを殺しそうな勢いで問い詰めてる。あ、俺？もちろん殺意はありますよ！（満面の笑み）というかマジで分からんぞ。何で悪い意味で有名なコイツがあのグレモリー先輩と知り合ったんだ？グレモリー先輩も迷惑そうじゃなかったし…。
「まあまあ、落ち着きたまえよ諸君。とりあえず冷静に昼飯を食べようではないか」
イッセーは実にムカつく顔で弁当を取り出す。…この野郎、調子に乗ってやがる…！
「まず…何でグレモリー先輩と登校してるんだ!?どうやったら俺も美女とキャッキャウフフできる!?」
「そうだ教えろイッセー！お前だけ甘い汁を吸おうったってそうは行かねえぞ!!」
非リアの魂の叫びが教室内に轟く。…とか言ってる俺も気になるんだけどな！それに、他のクラスメイトも気になってるみたいだし。でも変態に聞きに行くのは勇気がいると。
「先を越されちまったな、ブラザー！早くアンタも女でも作った方が良いんじゃないか？」
「…？でも、あの塔城小猫はソウに――」
「あああーっと！パス？ちょっとお喋りが過ぎるんじゃないか、なあ？笑顔にさせるロボットはそんな喋るもんじゃないだろ？お前は笑顔にさせるのが仕事だからな！」
…？何してんのみんな。分かった、とりあえず何でも良いからドタバタするのやめてくれ頭が凄く痛いです。あーっ！困りますウィッ

ト様！パスと暴れ回られては困ります！あーっ困ります！というか本気で痛いんでやめてもらってよろしいでしょうか!?

［結局こうなるのか…］

そのやけに落ち着いたクリプトの呆れた声は、頭痛に悩まされる俺には全く届かなかったのだった。

「おいイッセー、帰るぞ。結局あの場では聞けなかったけどな、俺も聞きたいことは山ほどあるんだからな」

授業も終わり、俺はイッセーと一緒に帰ろうとする。しかし、イッセーは渋い顔をしながらそれを断った。

「…すまん、今日帰れねえわ。用事があるんだよ」

「？用事ってなんだよ」

その返答について詳しく話を聞こうとすると、教室のドア付近から黄色い声がざわめくのが聞こえた。そこに居たのは、駒王学園の女生徒に囲まれる一人の男子が、困った様に笑っていた。

そいつの名は『木場裕斗』。スポーツ万能、成績も優秀、まさしく文武両道の文字が似合う男だ。さらに、容姿も整っており、Ｔｈｅ・完璧な人間である。

「兵藤一誠くんは居るかな？」

爽やかスマイルを振りまいてうちのクラスの女子をメロメロにしながら木場はとある人物の名前を口に出す。

「…おい、お前の用事って…」

「…ああ。――クソ、イケメンの横は歩きたくねえんだけどな…！」

純度１００％の嫉妬を抱えて、イッセーは木場の元へと向かっていった。その光景に周囲の女子達の中で戦慄が走る。

…まあ良いか。じゃあ俺は帰りますかね。

「な…なんで兵藤なんかが木場くんと一緒に…!?」

「嘘よ！そんな事あり得るわけが無いわ！これは夢…！悪夢なの…

！」
「――でも、案外良いかも…。兵藤×木場くんのカップリング」
「それを言うなら木場くん×兵藤でしょ？何言ってんのよ」
「は？」
「あ？」
「というか大丈夫なの!?阿久須×兵藤が無くなっちゃうわよ!?」
「――ハッ！ＮＴＲ…？」
「それだ!!」

おい待てコラ最後についてちょっと詳しく話してもらおうか？

［…ゴクリ］

ナタリー!?辞めて！喉を鳴らさないで！

その後クラスメイト達の誤解をしっかり解いた後、俺は帰宅し、着替えを済ませ近くの公園へと向かっていた。辺りは薄暗くなり、自転車に乗ってくたびれた様に帰る小学生がちらほらと見える。
…薄暗い時って、危ないんじゃ無いか？あの翼の男がまた襲ってくるかも知れないし…。
［うん。でも、今日教えるのは中々人には見せられないものだからね。ごめん］
本日の講師――パスが申し訳なさそうな声色で謝ってくる。嫌、別に謝らなくても良いんだけどね？また逃げりゃ良いし。

［そっか！じゃあ、僕が今日教える能力で逃走率が更にアップすること間違いなしだよ！］
そう自信満々に言い切るパスについ苦笑を漏らす。…逃げるだけで、迎え撃つことは出来ないのね。ちょっと情けねえなあ。
［そんなことはない。逃亡は決して『敗北』では無い、どんなものでも、使い方次第では武器となり得る。…今は我慢しろ、奴らの首を掻くのはそれからだ］
クリプトのその言葉に他のみんなも肯定を示している。…まあ、みんながそう言うんだったらそうなんだろう。…よし！とりあえず、パス！能力、お願いしまーす！
［ＯＫ！…とは言ったものの、もう能力は使えるんだけどね］
…え？俺はパスの発言に首を傾げる。――特に変化は無い様だけど…何か変わったのか？試しに足を振ったりしてみるが、何も起こらない。ならばと、今度は左腕を突き出してみる。
すると、手の甲辺りから、ワイヤーのようなものが勢いよく飛び出して行った。
「……は？」
シュルルル、と音を立てて腕の中へ収まっていくワイヤー。それを見た俺は数秒間惚けた後に――、
「はあああああああ!?」
自身の体に起こった異常に絶叫するのであった。

この能力――『グラップル』と言うらしい。ワイヤーを壁に引っ掛けて、大きく移動できる物なのだ。…まあ、簡単に言えばスパイ〇ーマンみたいな。

それを聞いた俺は早速試してみた。最初は上手くいかず、凄い勢いで引きずられたりしていたが、自然治癒のおかげでドンドン練習できた。その成果が出たのか、なんとか狙い通りに飛べるようになってきた。…まあ、成功率は五回に二回くらいなんだけど。

「あぁ～～！疲れた!!」

その場に倒れ込み、息を整える。だんだんと落ち着いてきたところで、今日の事を思い出す。

（イッセーの野郎…夕麻さんの事どーすんだよ…。グレモリー先輩と仲良いのは良いけど…彼女もどうにかしないとまずいだろ…）

新しい能力を得たところで、夕麻さん捜索に進展があった訳ではない。その事実に心の中で焦りが出てきた。

…というか、なんでアイツは自分の彼女をほっといて他の用事に構ってんだ？普通は自分が率先して探すべきだろうが…。…あー！なんか腹立ってきた！それを認知したらムカってきたぞこれ！あー、やってられませんわー！こんなん給料払って貰わないとやっていけな――。

――敵に狙われてるぞ！逃げろ!!――

「ッ!?」

その『声』が聞こえた即座に起き上がり、前方へ全力のヘッドダイ

ビングを繰り出す。受け身など考える暇も無かったので、顔にすり傷ができるが、それをお構いなしに俺は勢い良く後ろを振り向く。
そこには、つい先日見た光の槍が複数地面に突き刺さっていた。
…いや…いやいや、嘘だろ…？
暗い空を見上げる。やはりそこには、先日襲ってきた男が獰猛な笑みを浮かべていた。しかし、以前と変わっている点が一つあった。
それは――。

「おお、今の避けるんすか？ドーナシークの言ってた事ってマジらしいっすね」
「だから言ったであろう、ミッテルト。そいつには妙な察知能力があると。…まあ良い。嬲り殺しだ」

「二人がかりかよ…ッ！」

悲痛な呻き声を漏らすと同時に、空からの襲撃者は光の槍を投げつけてきた。

夜の攻防

「うおおおお!!」
駒王町に一つの叫び声が上がる。その声の主の青年は必死に走り続けていた。その表情は絶望の色で埋め尽くされている。まるで、肉食動物から逃げる草食動物の様な――、…まあ俺なんですけどね!
どこかおかしいテンションのまま俺は路地裏は駆け込んだ。奴らは空から俺を追いかけてくる。路地裏などの薄暗く、上から見えづらい場所では流石に――、

「なーに逃げてんすか、一緒に遊びましょーよ。ニンゲン」

その言葉が路地裏に響き渡ると同時に、無数の光の槍が俺に向かって飛んでくる。…やっぱり分かってたのか…!
しかし、それを読んでいた俺は手に現れた注射器を胸に突き刺す。
［Ｆａｓｔ!Ｆａｓｔ!!Ｆａｓｔ!!!最ッ高に楽しいなあ!ソウ?］
「うるせえなあ!こちとら殺されそうになってんだぞ!?楽しいわけねぇだろ!」
『アドレナリン興奮剤』を注入すると、全身が熱くなり、不思議な高揚感が脳を刺激する。
「――行くぜ!!」
驚異的なスピードを得た俺は迫ってくる槍を避けながら路地裏を抜ける。そのまま、人気のない場所まで走っていく。
「ざまみろバーカ!!逃げ出してやったぜこの野郎!ウハハハハッ!」
――お前、どこかから狙われてるぞ――
「うせやろ」
その『声』が聞こえると同時に、俺は探索能力――『全能の目』を発動。
（範囲は『俺から数十メートル』…対象は――『人外』だ）
すると俺を中心にオレンジ色のレーダーが広がっていく。そしてそれが最大まで広がったその時――、

「見つけた、斜め後ろだ！」
「ッ!?」
その方向を向くと光の槍を投げつける男が見えた。それを横っ飛びで回避。まさか自分の場所を知られるとは思っていなかったのか、その驚愕した顔に向かって――
「おりゃあああ!!」
『アドレナリン興奮剤』で強化した速度を上乗せした、強烈な飛び蹴りを繰り出す。しかし――、
「――ッ！甘い！」
一瞬目を向いた男だったが、すぐに冷静になったのか、首を傾け俺のキックを避けた。なんだよそれ。どんだけ動体視力良いんだコイツ…！
転がりながら距離を取る。それと同時に、『アドレナリン興奮剤』と『全能の目』を使った副作用が身体に現れた。
「…ッ！」
…痛えええええ!!超痛え！何だこれ!?体の節々が痛いわ、目からは涙出て痛いわ、転がって擦り傷できて痛いとかもうこれわけわかんねえな！
…しかし、勝負に出た甲斐はあったぜ。奴はやはり俺に警戒心を抱き始めている。今まで逃げるだけで攻撃をしてこない『獲物』に反撃されたんだからな…多少の驚きはあるだろ。
［へぇー…そんな事考えてたんだなあ！流石――はっ！…ま、まあ？俺もその策は考えてたし？なんなら一番最初に考えてた感じだから？言うまでも無かったというかそれが当たり前だったというか――］
［無様だな、おっさん］
［ハア？おいクリプトそりゃどういうことだ？今、俺の耳が確かだったら『無様』とか聞こえたんだが――］

［無様だな、おっさん］
［てめこのやろ］

シャアアアルルアアッップッッッッ!!ちょっと！黙って！大人しく！しとけ!!
「…貴様、何者だ？」
「あ？」
「最初はただの下等な人間かと思っていたが…貴様、『神器』をその身に三つ所持しているな？」
男は地面に降り立ち、その鋭い視線を俺に向ける。
「未来予知の神器、それと超高速移動――そして今見たレーダーのような物。――ああ、地味だが自然治癒も持っているか。これで四つ目だ」
「…よく見てらっしゃる」
呻く俺に鼻を鳴らし、嘲るような笑みを浮かべる男。少しずつ後退りしながら俺は男に問いかけた。
「…お前ら、何者なんだ？翼はついてるわ、光の槍飛ばしてくるわ、殺そうとしてくるわ…良い加減やめてくれよマジで」
「そういえば自己紹介がまだだったな。私はドーナシーク。貴様ら人間の上に立つ、『堕天使』だ」
「堕天使…？」
何言ってんだコイツ？頭沸いてんのか…って普段の俺ならそう思う所だが――、こんな事になってるって事はそういう人外が本当にいるって事なんだよな…クソ、なんで俺がこんな目に…！
目の前の男――ドーナシークを睨みつけ、次の一手を考える。コイツに対抗できると言えば――。
その考えに集中していたからだろうか。いつもなら危険を知らせる『声』が聞こえなかったのは。
どっ、と体に衝撃が走る。
「あ？」

眩い光の槍が俺の横腹を貫いていた。

「がああああッ!!」

熱した鉄をかけられたような痛みが俺を襲う。頭の思考が無理やり停止させられ、『痛い』という感情で埋め尽くされた。横腹に手を添え、噴き出す血を押さえながら後ろを向くと、そこには得意げな、ムカつく顔をした金髪の女がいた。

「ドーナシークに気を取られすぎたみたいっすね～？――アタシもいる事忘れんなよニンゲン」

…完全に忘れてた…！バカか俺は…！自分の作戦が上手くいって油断した結果がコレとか笑えねえぞ…ッ！

［大丈夫かソウ!?］

［大丈夫、傷は浅いわ、しっかり気を持って］

［浅いわけないだろ見ろコレ！ちょっとなんか出て――］

具体的に言うなァァァァッ!!止めろマジで！頼むから！力抜けちゃう!!

俺が脳内で必死の懇願をしていることも知らず、ドーナシークは邪悪な笑みのままその手に槍を生み出す。

「その傷では自然治癒も間に合うまい。今楽にしてやろう」

「あっ、ドーナシーク！それウチの手柄っすからね！」

…何が手柄だ。人のこと散々追い回しといて、挙げ句の果てには――殺して手柄にするだと？命をなんだと思ってやがる。軽く扱っていいモンじゃねえんだぞ…！

俺は震える左手を握り、目の前の野郎を睨みつける。それに気づいた男は俺が何をするのか、興味深そうに観察している。…苛々するぜ、何見下してんだこの野郎が。

そのふつふつと湧き出た怒りの感情を抑えることなく、俺は拳をドーナシークに突き出した。

「おおりゃあああ!!」

その突き出した手の甲から、『グラップル』が勢い良く飛び出た。完全に虚を突かれたドーナシークは目を見開く。…よし…!コレなら…。

――しかし、完璧な奇襲の筈だったグラップルは、ドーナシークの、首を傾けるという簡単な作業で避けられ、後ろの電柱へと突き刺さった。

「…く、くくくっ!くはははははッ!残念だったな人間!お前のその奥の手!俺に当てようと必死になっていたようだが、結果は残念!コレで本当に打つ手無しと言った所か!はははははッ!!」

「――いや、これで良い」

瞬間、『グラップル』がワイヤーを巻き取っていく。その引き寄せられる力に身を任せ、俺は再び拳を構える。

ドーナシークは未だに笑っている。

初めはゆっくりと動いていた俺の体は、『グラップル』が刺さった場所に凄まじい速度で向かっていた。

ドーナシークがようやく俺に気づいた。

焦りの表情を見せているが、もう遅い。弾丸のように向かっていく俺を前に、発現が遅い光の槍は通用しない――!

［ぶちかませ、ソウ!!］

「おおおおおおッ!!」

みんなの鼓舞を受け、俺はドーナシークの顔面に速度と重力を乗せた拳を叩き込んだ。

「ぶげあああああッ!!」

間抜けな声を上げて吹っ飛ぶドーナシーク。しかし、俺にも悠長にしている暇は無かった。

「――ッ!ドーナシークッ!?」

背後から悲痛な叫び声が聞こえる。金髪の女だ。俺の体は限界に近い、こいつに捕まれば今度こそ本当に終わる!

「――やるしかないッ!」

俺は再び、興奮剤を胸に突き刺す。今はこの場から――全力で逃げるしかない。痛みを感じなくなり、自分の鼓動が大きくなっていく。

夜の静かな住宅街を、俺は再び駆け抜けて行くのだった。

「はぁ…はぁ…追ってきてねえな…?」

逃げ切った俺は、念を押して迂回しながら帰路に着いていた。まだ横腹はズキズキと痛むが我慢でき無いほどではない。これくらいなら家に帰るまでには治ってるだろ…。

[よく生き延びた、ソウ。今日はゆっくり休め]

…でもなあ…家族のみんながこの惨状見てなんて言うか…。血もいっぱい付いてるしよ…。――なんか隠せる能力とかないの?

[バカ言えお前、今のその身体で能力使ったらぶっ倒れるぞ]

そのオクタビオの意見に肩を落とす。…しょうがねえ、俺の本来のステルス能力、見せてやるか…!

そうして家に着いた俺は、姿を完全に消し、自室へと戻った――

―

「あれ?お兄、いつ帰ってきて――キャアアアアアッ!?お、お兄!!血…血が!お母さーん!お父さーん!お兄が死んじゃう!!」

なんて事はなく、玄関で妹に秒でバレました。…腕を上げたな、我が妹よ。

デート…？

「よう、操！」

机にうつ伏せている俺にうんざりするほど元気な声がかかる。のそり、と起き上がると、その声の主はぎょっとした顔でこちらを見ていた。

「お…おい、大丈夫かよ、お前？なんか死にそうな顔してるぞ…？」

整った顔を心配そうに歪めるイッセー。…確かに今の俺の顔は酷いものになっているのであろう。昨夜の攻防の末、俺を待ち受けていたのは家族による質問攻めであった。

何があった、どこで何をしていた、その傷はなんだ、ｅｔｃ…。こっちは早く体を休めたかったのに次から次へと質問されるから、ようやく寝れたのは深夜過ぎ。もう死ぬかと思いましたね。

［まあ、親御さんの気持ちも分かるけどね…］

姉貴の呟きにみんなも頷いているようだ。

「お、おい！本当に大丈夫かお前!?どんどん顔から色が抜け落ちてるんだけど!?」

「…イッセー。今日はそっとしといてくれ。疲れてんだ」

「お、おう…何かあったら言ってくれよ」

そう言うと、イッセーはチラチラとこちらを見ながらも、松田達の方へと去って行った。

…こんな事が何回も続くと体持たないぞ…、――これからどうするかなあ…夕麻さんを探そうとすればあいつらが邪魔してくるし、こっちは命の危険もあるからそう気軽に手を出せない。なんかしようとしても何にもできねえ。

［…なあソウ、これはちょっとした提案なんだが…――もうこの件から手を引くのはどうだ？］

…どういう意味だ、ウィット。

［ああいや、別に完全に手を引けって訳じゃないんだ。そりゃお前

は納得しないだろうからな。…だけど今は危険が多い。まだ焦る時じゃない。能力を増やしていけば問題は無しだ。だろ？それにお前に何かあったら、お前のかあさんや家族が悲しむぞ」

ウィットはいつものようなふざけた態度ではなく、真剣な雰囲気を醸し出しながら俺に語りかける。…初めて見たぞ、そんな姿。

「母親には楽しく生きてもらわなきゃいけねえ。――だろ？」

それは普段とは違う、おちゃらけたウィットではなく、一人の息子として自分に言い聞かせている様な声だった。

「――ああ、分かったよ」

そんな声で言われたら聞かない訳にはいかないよな…。――それに、あいつ今グレモリー先輩といちゃついてるしッ！なんか俺が馬鹿みたいだしッ！本気で困ったらアイツから来るだろうからね！問題ないね!!

…というかなんでアイツがグレモリー先輩と仲良くなってんの？接点なかったよな？っはあ～（クソデカため息）結局は顔ですかい！そうですかい！良いよなイケメンはホイホイ美人と知り合えて！

「おい、アレどうすりゃ良いんだ？放置しときゃ良いのか？それとも止めれば？」

「ｏｈ…確かに周りの視線がエグいな…ま、俺はどっちでもいい」

「お前が焚きつけたのだろう…自分で起こした火は、自分で始末するべきだ…」

「いやいやいやいや！俺だけ!?ちょっと博士、そりゃ薄情なんじゃないか!?」

…よし、こんな時は気分転換だ。最近新しくできたスイーツ店が美味しいらしい。甘いもん食って栄養補給しよう！

…あ、そういえば。塔城とこの前一緒に行こうって約束した気が…。ま、いっか。一人で――、

［あら、ソウ？約束を破るなんていつからそんな悪い子になったのかしら？］
…ローバ、違えよ。これはちゃんと相手のことも考えてるんだ。俺と一緒だと『あ、塔城さんだ！…ん？隣に居るのは顔面クソ雑魚偏差値の阿久須じゃん！塔城さん趣味悪～！』ってなるだろ？…はあ、なるんだよなあ…。
［なんで勝手にダメージを受けてるのかしら…。――とりあえず、誘うくらいしなさい。約束を守れないとイイ男にはなれないわよ？］
…まあ誘うくらいなら…。結果は分かりきってるけどな！

「行きます。絶対に行きます。今日の放課後ですね？分かりました、それではホームルームが終わり次第そちらに向かいますのでよろしくお願いします」
一緒に行くことになりました。いやビックリしたよ。まず最初に、塔城のクラスの扉開けたらそこに塔城が居たんだもん。
たまたまなのか…？それにしては一番最初に俺の目をガン見してたし。
それで一緒にスイーツ食べに行かない？って聞いたら今の返答が返ってきた。そんなにスイーツ食べたかったのか…。あとちょっとは瞬きしよう？ほらどんどん猫みたいに瞳孔が開いて来た…え、すげえ。どうやってやんのそれ。
あと周りの視線が痛い。僕が何したっていうんですか。何にもしてないですよ。ああ、やめて！そのゴミを見る目やめて！
こうして俺は、下級生の視線に耐えきれず、すごすごと自分のクラスへと戻っていった。

「――また来たぞ、『塔城さんの彼氏』…！クソッ！リア充くたばれや！」
「塔城さん今めちゃくちゃ笑顔だもんなあ…彼氏にはツンツンしてるタイプか」
「か、かわいい！塔城さん、ほんとかわいいわ！」

「いただきまーす！……！甘！美味！」
「……!!」
目の前にあるパンケーキを食べる。ふんわりしていて、甘い。俺の貧困なボキャブラリーではそんなことしか言えないが、美味いというのは確かだ。
目の前では、『ジャンボビッグ巨大パフェ』なる、頭痛が痛いみたいな名前のパフェを目を輝かせながら食べている塔城が見え…ない。パフェがデカ過ぎて小柄な塔城の体が完璧に隠れていた。まあ、幸せそうな雰囲気ではあるのだが。
［このお嬢ちゃん相変わらずやばいな…こんなもん体のどこに入ってんだ？］
［有り得ない…質量的に彼女の胃袋に入るわけがない…！］
頭の中で戦慄しているレジェンドたちに苦笑していると、何やら目前にパフェの乗ったスプーンが差し出されている。

「――あ、あーん…！」

――時が、止まった。…オーケー、まずは状況判断だ。店内には少しの客。そして俺の皿にはパンケーキ。そして俺の目の前には顔を真っ赤にした塔城が差し出しているパフェ。かわいい。
――こ、これって…！『あーん』か!?古から伝わっている、リア充御用達のイベント、『あーん』なのか!?――いや落ち着け阿久須操。こ

こで固まっていては塔城に失礼だ。ビシッ！と食べてスッ！と『美味しい、ありがとう！（爽やかスマイル）』こう言えばいいだけだ！よし行くぞ見とけよお前俺は勝つぞお前！

「……」
「…ど、どうですか…？」
「オ、オイシッス…（小声）」

［ハア、これだから童貞は］
どっ！どどど、どどどどどどどどど（地響き）違うんだよぉ！やっぱり緊張しちゃうんだよぉ！見ろホラ！塔城顔がめちゃくちゃ赤いぞ！そんな嫌だったんなら最初からやるなよ嘘今の嘘凄い嬉しかったですありがとうございました!!
こうして、妙に気まずい空気のまま俺たちはスイーツを食べ進んで行った…。

食後の運動も兼ねて、気ままに駒王町を散歩する。横で歩いている塔城を見ると、学校では元浜いわく『無表情のお姫様』って言われてるそうだが…。
「ふん、ふん～」
…別に、そんな感じには見えないけどな…。むしろ満面の笑みを浮かべている。頭をゆらゆら揺らしながら鼻歌を歌う塔城を見ると心があったかくなる。
［…お？］
…なんだよオクタビオ。
［いっやあ～？何でもねえよ！］
…？訳分からんやつだな。まぁ良いか。
謎にニヤニヤしているオクタビオはほっといて、俺たちは近くの公園へと入っていく。すると、子供たちが遊んでいる中で、俺は見覚え

のある人影を発見する。

「…あれ？イッセーじゃねえか」

「お？…お、おう！操か！――ええ!?小猫ちゃん!?なんで!?」

「…ども」

悪友、イッセーがベンチに座っていた。奇遇だな――しかしなんでこんなところで――、

「――――！」

俺の思考はその可憐な声で中断させられた。声のした方向を向くとそこには、金髪のシスター服を着た可憐な美少女がこちらに駆け寄っている姿が見えた。

…いや、どういうこと？

聖女

少し状況を整理しよう。俺たちは少し休憩するために公園に来た。これは分かる。そして休憩しようと思っていたベンチに向かうと、そこにはイッセーがいた。これも分かる。さらにイッセーの隣を見ると、可憐な金髪小柄美少女が居た。これは分からん。

…うん。ッスー…うん。

「イッセー、お前誘拐はいかんぞ」

「いやいやいやいや！ちょっと待て何で俺が犯罪を犯したみたいな雰囲気になってんの!?ちげえよ！誘拐してねえ!!」

「あーあ、まさか友人が犯罪者になるとは思わなかったなー」

「だから何もしてねえって言ってんだろ!?」

「えと、そこの人？大丈夫ですかー？何かコイツにセクハラとかされて無いですか？なんかあったら言ってください通報するんで」

「話聞けやぁぁぁぁぁぁ!!」

一人でウキウキ鳴いてる猿は放っておいて、俺はイッセーの横に座っている少女に話しかける。すると、彼女は困ったように笑い、口を開いた。

『――――――』

…え？あ、あれ？今なんて言った？

「ご、ごめんな？ちょっとよく聞き取れなかった。もう一回、言ってくれ」

『…？――――――』

日本語じゃ…ない、だと…!?

コミュニケーションが取れないことに戦慄する俺。そこに、先程の少女の声を俺経由で聞いたのかウィットが頭の中で声を発する。

「あーっと、ソウ？その子、多分イタリア語で喋ってるぜ」

え？イタリア？いやまあ、たしかに外見的から見て日本系では無いとは思ってたけど、何でウィットがそんなこと分かるの？

［俺はもともとバーテンダーだったからな。いろんな人を相手していた。その中にはイタリア語を話すお客様もいてな。その人に教えてもらったイタリア語がその子の声の中に入ってたって話だ。ま、俺も完璧にはイタリア語は話せないんだがな］

ほえー…ウィットニキバーテンダーだったんすねぇ…。――あれ？じゃあちょっと待てよ？何でイッセーはその子と一緒にいるんだ？話せないはずだろ…？

「なあイッセー。何でその子と――」

それを聞こうとしたその時、公園に甲高い泣き声が響いた。

俺たちがそちらの方を向くと、子供が蹲って泣いている。どうやら転んでしまったようだ。よく見ると膝を擦りむいている。

流石に見て見ぬふりもできないので、俺たちはその子に駆け寄った。

「おーい、大丈夫か？」

「うわあああああん!!」

「あっちゃー…結構擦りむいてんな。イッセー、とりあえず水で洗おう。連れてくぞ」

「おう！」

水道へ連れて行こうとしたその時、イッセーの横に居た少女が優しく笑いながら子供の膝に手をかざす。すると――緑色の優しい光が、少女の手から輝いた。

「――なあ!?」

「ええ!?」

「…！」

俺とイッセー、塔城は驚く。そのまま様子を見ていると、緑色の光が徐々に収まっていった。すると、子供の擦りむいた筈の傷が何事もなかったかのように、無くなっていた。

『――』

「うわあああ…あれ？いたくない！」

子供は泣き叫んでいたが、自分の傷が無くなっているのを見ると、目を丸くする。そして、その事実を確認したのか、笑顔で少女にお礼を言った。

「ありがとうおねえちゃん！」

『――――』

その言葉は分からないはずなのだが、少女は子供に笑いかけた。

俺はイッセーにあの光は何なのか問おうとしたその時、子供の名前を呼ぶ声が聞こえた。どうやらこの子の親のようだ。その子の母親は、金髪の少女を、まるで化け物を見るかのような視線で眺めた後――、

「――っ!?ほら、行くわよ」

礼も言わず、立ち去った。

「――ッ、おいあんた――！」

それにイッセーが険しい顔で噛みつこうとしたが、それは少女の手によって止められた。

『――――』

少女は、哀しい目をしていた。

イッセーに何故イタリア語を話せるのか聞いたところ、どうやらイッセーは駒王学園の受験勉強をしていた際に、イタリア語も覚えていたそうだ。いつの間にか博識になってて笑う。

彼女の名前は『アーシア・アルジェント』。なんでも癒せる超能力を持ったシスターらしい。しかしその能力が故に、迫害されてきたことも少なくなかった。…誰かを助けたのに、周りがどんどん離れていくなんて…周りの奴らはどうなってんだよ。

やるせない憤りを感じると、イッセーも同じ感情を抱いたのか、拳を握りしめている。塔城は何やら顔が青ざめている。…なんで？

そんなアーシアさんは路頭にくれていた所、ここの駒王町の教会に拾われたという。そこで働くため日本に来日した…のは良かったん

だが、初めての地で右も左も分からない状態、そこに出会ったのが――。

「何でこんな可愛い子を迫害なんてしたんだろうな…！絶対教会潰す」

この変態だった。…まあ、コイツと会ったのが、不幸中の幸いというか。今はアーシアさんを教会に案内している途中らしい。俺たちも関わった直後にさよならとはいかないので、一緒についていく。…塔城は頑なに俺を行かせるのを拒否していたけどな。なんで？そんなに信用ない？もしかしてイッセーより危ないとか思われてんの？

「おおう、急に寒気が…！――と、着いた！ここが教会だぜアーシア！」

『――――！』

そんなことを思っているうちに教会へ着いた。アーシアさんは何度も頭を下げている。いやあー。心が浄化されるなあー。

アーシアさんはお礼がしたいらしく、俺たちを教会へ誘ったが、その時塔城が血相を変え――、

「いえ、大丈夫です。いきましょうイッセー先輩、阿久須先輩」

と俺たちを馬鹿力で引っ張っていった。ずるずると引っ張られた後、イッセーと塔城はオカルト研究部の集まりがあるとか言って、そのまま駒王学園へと去っていった。

…なんか今日はいろんなことがあったなぁ…。

[なあなあ、シェの姉貴。あのコとアンタのドローン、どっちが使い勝手楽なんだ？]

[ウチに決まってるじゃない。…って言いたい所なんだけどねぇ、正直、ドローンを必要としない回復ってだけで良いわ。コストもかからないし、回復力も申し分ない。…結構自信無くすわね]

俺はシェのドローンも頼りになると思ってるぜ、元気だしなよ。

[…ありがと、ソウ]

[あ、姉貴がデレた…！]

［アァん!?だぁれがデレたってぇ!?］
頼むから頭の中で乱闘しないでくれー、頼むー。…マジでやめろやお前らァ!!（豹変）
ズキズキと痛む頭の中で、とある疑問が浮かんだ。
（イッセーのやつ、イタリア語勉強したって言ってたけど…何で『日本語』でアーシアさんと話してたんだ？アーシアさんとも会話できてたみたいだし…）
ま、いっか。とりあえず俺がしないといけない事は――。
「コォルルルァテメェら良い加減にしろやァァァァァッ!!」
コイツらを静かにさせる事だな。…はあ。

再会

「イッセー先輩、もう絶対に教会には近づかないでください」
俺たちが教会を去り、しばらく歩いていると普段のマイペースな雰囲気とは程遠い、真剣な表情で小猫ちゃんが俺に顔を向けた。
「…え？な、何で…？」
突然のその小猫ちゃんの発言に虚をつかれる俺。せっかくアーシアとも友達になれたのに…どうしてそんな事言うんだよ。
「教会と悪魔は敵対関係にあります。悪魔であるイッセー先輩があそこに行ったら、ただの良い獲物です」
小猫ちゃんによると、教会には『悪魔祓い』とか言うその名の通り俺たち悪魔を祓う――殺すスペシャリストみたいな奴らが沢山居るらしい。
俺はそこに自ら行こうとしてたわけか…。背筋に嫌な汗が通るのを感じる。
「…とりあえず今日の事は部長に伝えておきます。後でしっかり絞られて下さい」
「ええ!?そりゃないぜ小猫ちゃん！」
肩を落とす俺に苦笑する小猫ちゃん。やっぱり駒王学園のマスコットと呼ばれるだけはあるな…！普段の鉄面皮とのギャップの破壊力が凄えぜ…！
そう俺が悶えていると、小猫ちゃんは学園へ歩き始めた。慌ててそれを追う。

（アーシアさんは何も知らされていない。…けど、教会が阿久須先輩に何か危害を加えるようであれば…私は――）

今日も元気に頑張るゾイ!と自分に喝を入れ、日課となった夜のランニングをする。
今日はウィットが能力を教えてくれるらしい。どんな能力なんだろうか。そろそろ撃退できるような能力が欲しいんだけど…。
[あー、まあ、うん。まあ…]
出来ないんだね。ごめんね贅沢言って。逃げれるだけでもありがたいからそんな落ち込まないで…。
ウィットの悲しい声をBGMに駒王町を走る。一通り走り終えた後、公園に行こうとしたその時――、
「ぐあああああああっ!!」

静寂な夜の街には相応しくない、悲痛な叫び声が聞こえた。
足が強ばり、呼吸が荒くなる。飛び出るんじゃないかと思うほどに心臓の音が大きく聞こえる。
俺の脳裏に、あの人外の二体がよぎる。俺を躊躇なく殺そうとしてきた奴ら。またこの付近に現れたのか?だったら早く逃げた方が良い。けど――、

――けどなんで、叫び声がイッセーの声なんだよ。

俺は震えながら、『全能の目』で叫び声が聞こえた家を視る。対象は、『人外』と『兵藤一誠』で。
大丈夫。イッセーなわけない。人外だったとしても、すぐ逃げればいい。だから――。

そう思っていた俺の視界には、足を抑え蹲っている人型のオレンジ色のシルエットが透視された。
「――っ」
それを見た瞬間、俺はそこへと走っていた。玄関の鍵は空いていた。靴箱を見ると駒王学園指定の革靴がある。それによりまた一層

焦りが俺を蝕んでいく。
リビングの扉を勢いよく開けて、叫ぶ。
「イッセー!!」
その光景は、一言で言うと地獄だった。人が壁に磔にされている。上半身だけの体は、十字架に貼り付けられているようだ。ぷらん、と臓物が垂れ下がっている。その表情は、苦痛に満ちたおぞましいものだった。
「う――っ」
腹から熱いものが込み上げる。背中を曲げ、その物体を出そうと生理的欲求に身を委ねようとした時に、頭の中で『声』が響く。

――おまえ狙われてんぞ！避けろ！――

それが聞こえた瞬間、横に飛び退く。すると先程までいた場所がすっぱりと切れていた。
「――なんで避けちゃうんです？すっぱりしっぽりあの世に送ってあげよーと思ったのにぃ!?」
その声の方に顔を向けると、そこには白髪の神父がいた。そいつは何が面白いのかげらげらと笑っている。
「――アンタ神父さんだろ？こんな事して神サマに怒られんじゃねーの？」
「んん～心配ご無用ナッスィング！俺っちの神様はそんな事で怒りゃーしやせん！ああ、慈悲深け～主に感謝感謝！」
［主を信仰してる上で何そんな事を抜かしているんだブチ殺してやるこの腐れ○○○○ッッ!!］
［ちょっと!?ブラッドハウンドがキレてるんだけど!?］
［あー…多分あの小僧の神さんの扱い方が雑だからブチギレちまったんだな。よし、関わらんとこ。触らぬ神に…あ、やべ神って言っちまった］

［我が名はブロスフゥンダル!!］
［おさえろおさえろー！］

どったんばったん大騒ぎのところ悪いんですけど緊急事態なんです！ちょっと静かにしてて！お願い!!（切実）
――とまあ置いといて。コイツマジでイカれてやがる…多分この磔にされてる人を殺したのもコイツだ。なんか光ってる剣持ってるし。銃もあるし。
［ブラザー、落ち着けよ。お前には俺たちが付いてる］
兄貴の言葉にパニック気味になってた気持ちが静まっていく。よし、まずは状況判断だ。
目の前にイカれ神父、その奥にソファー、その横に倒れているイッセーと半裸のアーシアさん。…ん？

「――ええ!?」
「操!?お前なんでこんな所に…！――ッ逃げろ！殺されるぞ！」
「――ッ!?」
驚愕の声を荒げるイッセー。アーシアさんもイッセーに手をかざしながらこちらを驚愕の表情で見ていた。
イッセー一人だったら逃げれなくもないが、アーシアさんが居るのは聞いてないぞ…どうしようか。
「ありゃりゃ、君もしかしてこのクソ悪魔くんの友達？オイオイオイオイマジで言ってる!?それはそれはコッケーですなぁ！」
「…悪魔？」
「え、知らなかったの？ええ…チミが馬鹿なのか、それともこの悪魔クンが隠すのが上手かったのか…。――まいいや、どーせ二人殺すし」
そう言い切るや否や、神父は猿のような素早い動きをしながら手に持っていた剣で襲い掛かってきた。
「――やば」
即座にアドレナリン興奮剤を打ち込み、その剣を避ける。興奮剤の効果が解けるのは体感的に6，7秒。その間にどうにかしてケリをつ

けないと…！
神父の顔が驚愕に染まる。しかし、それを気にする事なく――。
「オラァッ!!」
「タコス！」
思いっきり、その驚愕に染まっていた顔面に蹴りを入れた。何やら訳の分からない叫び声を上げながら壁に激突する神父。
それを見届けたと同時に、興奮剤の副作用が体を襲う。
「――ッ痛つ…！よし、イッセー、アーシアさん連れて逃げるぞ」
「お、おいお前それどういう…！」
「説明は後だ、多分もう俺の攻撃は通用しねえから。さっさと――」
その時、俺たちから少し離れた場所に、赤い魔法陣のようなものが浮かび上がる。…嘘でしょ？
「またなんか変なのが来んのかよ…！」
「――！いや！あれは――」
やけに喜色満面の顔をしたイッセー。その反応に眉をひそめていると、その魔法陣の中から人影が見える。その正体は――。
「イッセー！助けに来たわよ、無事かしら？」
「ぶ、部長おおおお!!」
「部長おおおおお!?」
駒王学園、オカルト研究会部長の、リアス・グレモリー先輩が、その紅い髪を揺らしながら現れた。

オカルト研究部

グレモリー先輩が紅い髪を揺らしながら、血に濡れた凄惨な部屋に足を踏み入れる。
「大丈夫かい、兵藤君？――っ、君は――」
それに続いて駒王学園のアイドル、木場裕斗がこちらを見て驚いていた。右手に持ってる剣がとても怖いです（小並感）
「あらあら～、これは…」
さらに次に出てきたのはグレモリー先輩と対を成す『二大お姉様』のひとり――姫島朱乃先輩が、頬に手を当てながらニコニコと笑っている。
そして――、
「――せん、ぱい…」
呆然と立ち尽くす、塔城がそこにいた。

「とりあえず言いたいことはあるけど――よくも私の下僕を可愛がってくれたわね」
「どういたしましてぇん！お代はてめーらの薄汚え生首でヨロピク！」
イカレ神父の汚い雑言に端正な顔を顰めるグレモリー先輩。その隙に、オカルト研究部の一同がこちらへ寄ってくる。
「たしか…阿久須くん、だったよね？どうしてここに…」
眉を顰め俺に問いかける木場。それを見たイッセーが助け舟を出してくれる。
「違うんだ木場！操は関係無え！こいつもただ巻き込まれただけで――」
「巻き込まれた？…それは本当に…災難だったね」
「…おお。ところでさぁ――アンタら、何者なんだ？あの魔法陣みたいなやつから出てくるって、一般的な高校生にはできねーと思うんだ

けど…」
その俺の質問に苦笑で答える木場。いや答えろよ、怖いだろ。俺は非難の目を向ける。
「とりあえず。ここは危険だから避難した方がいい。話はそれからだね」
「…せ、せんぱい、えと、その――」
どこかばつが悪そうに塔城が目を逸らして俺に歩み寄る。…とりあえず今は守ってもらおう。そうしよう。俺弱いからね、しょうがな――、

――めちゃくちゃ来てる！すげえ数だ!!――

……マジで言ってんの？
その俺の疑問に答えるかのように、血相を変えた姫島先輩がグレモリー先輩に声をかけた。
「――ッ、部長！この場所に堕天使の反応が近づいてきていますわ！それも数多く！」
それを聞いたオカルト研究会の面々の顔が強張る。すると真っ先に動いたのはグレモリー先輩であった。
一度イカれ神父を睨み、イッセーの真横に手をかざした。すると、オカ研が登場した際に出てきた魔法陣が床に現れた。
「撤退するわよ、みんな！イッセーも早くこの中に！」
撤退できるんすかぁ!?何ですか先に言ってくださいよ水臭いなあ！あーよかったよかったこれでとりあえずは安全だな！
「分かりました！――部長！アーシアと操もお願いします！」
お願いしまァす！
「――私の魔法陣は、私の眷属だけしか使えないの」
は???????

俺はその言葉を聞いた瞬間、頭の中がからっぽになった。撃ち抜かれた足の痛みなんてもう感じなかった。…お、俺の聞き間違いだよな、ぶ、部長がそんなこと言うなんて…。
俺は再び、震える声で部長に問いかける。
「ぶ…部長、今は冗談キツイっすよ、はは…。操とアーシアも一緒に逃げれるんすよね？」
「……」
部長は目を伏せ、何も言わない。そ、そんな仕草したら、まるで――まるで本気で言ってるみたいじゃないすか。
「――どうするんですか、操とアーシアは！堕天使が大勢来るんすよね!?二人とも危険じゃないですか!!」
「――撤退するわよ」
「部長ォッ!!」
「イッセーっ!!」
引き下がれない。ここで引き下がったら、俺は大事なものを失ってしまう。アーシアとまだちょっとしか遊べてないんだ、友達になったばっかなんだ。――それに、こんな事に巻き込んじまった親友を見殺しになんて出来ねえ！
「イッセー君、君の気持ちは分かる。けどダメだ」
「うるせえよ木場…！」
「堕天使に囲まれてしまって圧倒的不利な状況で戦えない二人を守りながら撤退――それが出来たらもうしてるんだ」
「それでもッ――」
その時、俯く木場の握りしめた手から血がぽたぽたと流れるのが見える。わかってる。こいつも悔しいんだ、こいつも助けてくれようとしてるんだ、けど――。
「じゃあ――どうすりゃいいんだよ…ッ！」
力を持たない俺には、小さく呻くことしかできないっていうのか…

？

「私が残ります」

え…？

驚いてそこを見ると、何かを決意したような表情をした小猫ちゃんがいた。

「小猫！あなたまでわがまま言わないで！私は大事な下僕を失いたくないの！」

「それは私も同じです。私はまだ阿久須先輩に助けてもらった恩を返してませんから」

「小猫――！」

それに、と小猫ちゃんが続ける。

「先輩の居なくなる一生なんて、死んでるのと同じことです」

そう言って、小猫ちゃんは操の隣に立ち、構える。

小猫ちゃん…！――後輩にだけ任せて、先輩が挫けて倒れてる場合かよ…ッ！

「――うおおおおおお！」

痛む身体に鞭打ち、立ち上がる。一歩一歩地面を踏みしめ、俺も操の隣に立つ。

「――へへ、悪いな操、こんなのに巻き込んじまって。…アーシアも、絶対助けてやるからな」

精一杯の笑顔を振り絞って二人に顔を向ける。アーシアは泣きそうな顔をしていた。…優しいな、アーシアは。そして操は何やら訝しげな表情を見せている。しかし視線はこちらを向いていない。…どうしたんだ？

すると操は一つため息を吐き、俺に向き直る。そして――、

「いや、大丈夫だ。お前ら二人はぱっぱと行け」

口角を上げ、そう言った。

最初は何を言われたのか分からなかった。そして、徐々に怒りが込み上げてくる。この緊迫した状況で何言ってんだこいつは…!?今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ…!

一言言ってやろうと口を開こうとすると、先に隣から怒号が聞こえてきた。――小猫ちゃんだ。

「――先輩、今はそんな冗談言える場合じゃないんです…!大人しく私たちに守られて――!」

「だから大丈夫だって。それにこのまま居たら多分――グレモリー先輩に迷惑かけるやつだろ?先輩の言うことは聞いとけ、クレープ奢ってやるから」

「おい、操――!」

「それにイッセー怪我してんじゃん、それで完璧に俺たち守れんのかよ?」

「――ッそれは」

「塔城も。借りた恩を返すんならもっと他の場面で返してくれ」

「いい加減にしてください!早く今のうちに逃げて――!」

でも、なんかおかしい。操は何でこんなに冷静に居られるんだ?普通の人だったら気が動転してこんなに落ち着けるわけねえ…。

操は未だに憤慨している小猫ちゃんを見てため息を吐く。そして俺に向き直った。

「イッセー、頼むわ」

その真剣な表情に、俺は何も言えない。拒否の言葉を出そうとするが、真っ直ぐな視線にどこか安心感を感じてしまう。

「…大丈夫なんだよな」

「イッセー先輩…?うそ、うそですよね…?」

その小猫ちゃんの声に罪悪感を感じる。それとは対照的に操はほっとしたように笑みを浮かべた。
「おお、大丈夫だ。俺には頼りになる奴らがついてる…憑いてる？のか？憑いてるで合ってんのか…まあいいや、とりあえず任せろ」
そう言うと、操は部長に目を向ける。それに頷いた部長は、俺を背負い、魔法陣へと歩いていく。
「小猫ちゃん、行きましょう」
そして小猫ちゃんは朱乃さんに担がれた。抵抗していたようだが、クイーンである朱乃さんには勝てない様子だ。
「やめて…！離してください！先輩が――！先輩！」
抵抗も虚しく、オカ研の全員が魔法陣に乗り――、
「嫌あああああああ!!」
その悲鳴と同時に、俺の視界は真っ白になった。

煙とトランポリンとデコイ

「――さて、と…」

俺は息を吐き、目の前のイカれ神父を見据える。自分が有利だと確信しているからか、ニヤニヤしながら剣をぷらぷらと揺らしている。

「――」

アーシアさんは目の端に涙を溜めながら俺の服の袖の端を握っている。その表情は罪悪感に苛まれている様子だった。

俺はアーシアさんの頭をぽん、と軽く叩き、口を開いた。

「どうやらアンタをやっつけてもハイ終わりって訳にはいかないらしいな」

「ハァ?やっつけるゥ?俺っちを?――ギャハハハハ!面白い冗談言いますねえ君!」

甲高い声で笑う神父。そう。多分俺の攻撃は見切られる。オクタビオの興奮剤が今俺が出せる最高速度。こいつはこんなナリだが戦闘センスは高いだろう。そして俺は戦った事なんてない(この前のアレは逃走に含む)ズブの素人。

俺だけだったら確実にやられるだろう。…俺だけだったらな。

[おう!ぶっ飛ばそうぜコイツ!]

[そうね――こんな良い子を泣かせるなんて、許せない]

[では、ソウ。今言った通りにするんだぞ]

…はいよー…。

今回は辛そーだなぁ…。

「そんじゃ――」

俺はそいつの能力をイメージする。そのイメージが具現化し、俺の手に現れる。

「いっちょやりますかぁ!」

現れたランチャーを肩に担ぎ、俺はアーシアさんを抱き寄せた。

「なん――」

神父が俺の行動を止めようとする。しかしもう遅い。俺は神父にランチャーを向ける。

「くらえええええ!!」

その大声と共に、俺はトリガーを引いた。神父は物陰に飛び込み、それから逃れようとする。――しかし、俺のランチャーから出てきた弾は、床にぼすん、と落ち、そして――。

ぼしゅん!!

という音と共に、家の中が煙に包まれた。

「……は?」

その声を置き去りにして俺はアーシアさんを抱えて家から飛び出す。そう、俺がイメージしたのはアニータの『スモークランチャー』。その名の通り煙が詰まった缶を発射して煙幕を展開するものだ。

こいつは見た目がゴツい。だからあいつは普通のランチャーかと思ったんだろう。あの神父は騙されたのだ。そう、つまり――、

「ぶはははは!騙されてやんのー!バカだ!バカがいる!!」

全力で煽れるって事ですねえ!!

「〜〜ッテメェッ!!逃げんなブチ殺してやるッ!!」

家の中から怒号が聞こえてくる。あー無視無視。よし、さて次は…。

「うわ…めっちゃいる」

夜空を見ると、ちらほらと翼が生えた人影が見える。まあそうです

よね。追いかけてきますよね。というかなんか光の槍がいっぱい見える気がするんですけど気のせいだよね！気のせいですよね!?

――――降ってくる――――

はーい（諦め）

まあこんくらい移動すれば何とかなるかな。そろそろ帰ろう。俺はイメージをする。

（さっき言われたことを思い出せ）

五分前。

［――――そのままさあ、その女持って帰ったら良いんじゃね？］

イッセーらが喋っている間に、オクタビオが提案をする。

ええ…？何言ってんの…？

［どーせ時間かけても逃げれねぇと思うし、そんならぱっぱと走ってやり過ごそうぜ!!］

いやいや。できれば俺だってそうしたいよ。でも今俺が使えるのは『興奮剤』『自然治癒』『全能の目』『虚空の声』『グラップル』だぜ？興奮剤ならまだしもあとの三つは使えないだろ…。グラップルは密室だから意味ないし。

［使えないなら、増やすまでよソウ］

静かにアニータが声を出す。もしかしてこの状況を打破する――

［ええ。私の能力を教えるわ］

ナイスゥ！（本音）ナイスゥ！（本音）

で、どんな物なんでしょうか!?

[『スモークランチャー』。それが貴方を助ける武器になる]

イメージが頭に流れ込んできた。…なるほどね。これは良い。今ここでやるんだったらうってつけの能力だな！

よーし、じゃあランチャー撃ったらぱっぱと――、

[しかし、外には奴らが来るらしいぞ。外に出てどうする？]

終わった。短い人生だったなあ――、あ、俺一回死んでたんだった。なら怖くないや！ははは!!

[まあ落ち着けよ、ソウ。そんなお前に朗報があるぜ！]

…なんだよオクタビオ。お前の能力はもう全部出てんだろー。

[俺の三個目の能力を教える!!]

ええ!?何個持ってんの能力!?驚く俺に笑いかけ、オクタビオは説明を始める。

[俺たちは三個持ってんだよ。で、俺が今から教えるのは奥の手ってやつだ！イメージ流し込んでやるから待ってろ！]

え？奥の手ってそんな出して良いもんなの？

[とりあえず出しときゃ何とかなるんだよ！]

[――だがその奥の手――私たちは『アルティメット』と呼んでいるが――体力の消費が激しい。物によるが危険な物もあるのだ、多用するな。あくまで奥の手だ]

レヴナントの言葉に眉を顰める。あれよりヤバいのが来るのか…まあ。死ぬよりかはまだマシだろう。

[安心しろよ、俺のやつはそんなヤバくねえやつだからよ！…と、できた！]

流れ込んできたイメージに驚愕する。…怖くねこれ？

［死ぬよりかはマシ。なんでしょ？］
そうなんだけどさぁ…。ナタリーのいたずらな声に肩を落とす。
よし、じゃあ――。

［いーや。もうちょい足りねーなあ？］

そこで声を発したのは――。

オクタビオの奥の手をイメージする。するとアーシアさんを担いでいない手に、中型の緑色のトランポリンのようなものが現れた。それを目の前に設置して、思いっきり――、

「――――!?!!?」

飛んだ。すると俺たちはグングンと高度を上げて行き、街が見渡せる高さまで到達した。アーシアさんは目を回している。ごめんね急に。
そして俺はもう一人の能力を発動させる。その瞬間――、
――俺が六人に増えた。

［飛んだあとどうするんだ？あいつらぴゅんぴゅん…あのー、変なの撃ってくるぜ？］
じゃあどうすればいいんだよ。そう口を挟んだウィットに疑問をぶつける。
［任せろ、俺の能力は陽動向きだ！やつらおつむが弱いからな！すぐに騙されてくれるぜ！］
じゃあ、なんなんだ？ウィットの能力って――――。
［俺の能力は、自分そっくりの囮（デコイ）を作れる。――大丈夫だソウ。お前は一人じゃない。文字通りな］

「――騙されろ」

その言葉とともに、六人の俺がそれぞれの方向に散らばっていく。『デコイエスケープ』――自分を中心に展開するように六人のデコイを発現させる能力。
後ろ目で見てみると――おお、堕天使のやつら、全然別方向に行ってる！動揺して光の槍消してる奴もいるぞ！
［奴らを仕切るお偉いさんが居ないから即座に行動できてねえぞ！ハハっ！やっぱりおつむが弱いんだな！］
作戦は大成功だ！よし、あとは着地してすぐに身を隠しながら帰れば――、

これどうやって着地すんの？

［あ］

…『あ』じゃねえよ！何してんの!?いや俺も気づかなかったのが悪かったけどさあ!?これは違うじゃん！おつむ弱いの俺らじゃん！

［ソウ！僕のグラップルを使うと良いよ！］

無理無理無理無理！慣性が無くならない！それにアーシアさん抱えてビュンビュン飛べねーって！

［ああ。もうおわりだね］

淡々と言うなよ鉄屑スクラップにすんぞゴルァ――やばいやばい地面近づく近づくハイ終わ――、

［やれやれ、落ち着きなよ］

地面に足が触れたその時、衝撃が来なかった。まるで、その瞬間だけ重力が無くなったかのように、フワッと着地した。

「……な」

それにも驚いたが、俺に強烈な疑問が溢れる。

「だ、誰…？」

今まで聞いたことない声が聞こえてくる。それは少し歳をとった声色。まるで母親に諭されているような気持ちになる。

［早く走りな～、敵さんが追ってくるよホラ早く］

その声で正気に戻り、意識を今に集中させる。そうだ、まずは逃げ切らないと。そうして、完全に伸びたアーシアさんを担いで、俺は自宅への道を駆けるのであった。

１４人目

「…で。あなたは一体誰なんでしょうか…？」
　無事逃げ切れた俺は、目を回したアーシアさんをベッドに寝かせて、椅子に座り、先ほどの聞いたことない声の主と対話をしようと試みる。因みに、気絶したアーシアさんを連れて帰ると家族が怪しい目で俺を見ていた。妹はスマホ取り出して１１０番しようとしてた。俺は泣いた。
［私はマリー・ソマーズ。気軽にソマーズ博士と呼んでもらって構わないよ］
「は、はあ…」
［そんな固くなるんじゃないよ！何も取って食おうってわけじゃあないんだし］
「わ、分かった…。えと、ソマーズ博士。さっきのふわっとしたやつって――」
　あの時、飛んだ高さは着地すれば間違いなく重症になるものだった。それが何故衝撃が来なかったのか。まるで、着地する瞬間だけ俺の体が無重力になったみたいに――。
［ああ。私の能力だよ。どれだけ高いところから落ちても、ふわっと優しく着地できる…おっと！こらニュート！］
　説明をしていたソマーズ博士は、突然誰かと会話をし始めた。ニュート？誰？
［私の息子だよ、普段はいい子なんだけどねえ…どうやらアンタに挨拶したいみたいだ］
　あ、お子さん居るんすね…。その間にもソマーズ博士とその息子は何かを話しているようだ。どうやらその息子はこちらに来れるらしく、俺に会いたいそう。
「全然大丈夫ですよ、ソマーズ博士。家族はみんな寝てるし、ちょっとくらいなら。それに俺も話してみたいし」
　そう言うと、ソマーズ博士が呆気に取られた雰囲気を出す。
［コイツはこういうやつなんだよ、アンタもあっちから見てたんだ

ろ？」
「あっち？」
オクタビオが放った言葉が理解できず、首を傾げる。あっちって何…？
［ん？あまだ言ってなかったか？俺たちはお前がママの腹の中にいる時からずっといたんだよ］
…ええ!?でもお前らと話せるようになったのは中学の時じゃ――、
［あ、こら！］
オクタビオに困惑をぶつけようとしたその時、俺の頭に能力を使うイメージが映し出され、それと同時に体に凄まじい疲労感が襲ってきた。
（う――！な、なんで急に――）
椅子から転げ落ち、大量の汗を掻きながら突然の異変に動揺する。誰のだ…！おいお前ら、急に何してんだ…？誰が送ったコレめちゃくちゃ疲れるんだけど!?過去一疲れてる！
息を整えて、俺は頭を上げる。と、とりあえず体力を…。
［♪］
俺の目の前に、白いル○バみたいな謎の無機物が居ました。…え？いや、え？
［はあ…すまないね、ソウ。その子が私の息子、名前は『ニュート』。仲良くしてやっておくれ］
［♪♪♪］

なるほどね、そういうことか！（思考停止）

〔♪♪〕

この…ニュート君。何やら凄い俺に引っ付いてくる。コミカルな音を鳴らしながら擦り寄ってくるこれ…彼にはどうやらちゃんとした意思があるらしい。

［ニュートはアンタに会いたがってたからねえ。遊んであげてくれないかい？］

いや、まあそれは良いんですけど…。

チラッとニュート君を見ると、俺の膝に乗ってその機体を揺らしていた。ちょっとかわいい。

「なんか弟みたいだなあ…。よしよし」

〔♪♪！〕

カパカパと上部分を開閉させながら喜ぶ（多分）ニュート君。本当に可愛いじゃないか。最初はどうなることかと思ったけどちゃんとこうしてコミュニケーションは取れるから、このままずっと出してても――、

［あ、気を付けなよ、ニュートの内部はブラックホールになってるからね。間違って巻き込まれたらその時点でサヨナラだ］

「ハアアアアアアウスッッ!!ニュートォ！ハウスッ!!」

てろりーん…と悲しい音を鳴らしながら消えていくニュート。あっぶねええ！そんな恐ろしいもの内包してる君がパカパカ頭開けてんじゃねえよ死んじゃうだろ!!ケラケラと笑っているソマーズ博士に思わず手が出そうになった。出せんけど。

「――？」

そんなダイ〇ン真っ青の吸引力を見せつけられた所で、アーシアさんが目を覚ました。眼を擦り、状況がまだ理解できていない様子だ。
「あ、どうも…」
「――？――!!」
俺が声をかけると目を見開き、何か喋り始める。しかし俺はフランス語がわからない。だからといってウィットの通訳を介するのは時間がかかる。となれば――、
「…あ、もしもし。イッセー？」
『操！お前大丈夫なのか!?』
「――っ、あんまりデカい声出すなよ…！」
会話できるやつを使うしかないって事だな。他力本願最高。

ホットココアをイッセーと通話しているアーシアさんに渡す。ぺこりと頭を下げられ、それにかぶりを振って応ずる。
さーて、これからどーしたもんかねぇ…。イッセーやオカ研は多分アーシアさんの事情を知ってる。けど俺は完全な第三者だ。あのイカれ神父や翼のバケモン共の事が何も分からない。
［成り行きに任せた方がいいんじゃね？あいつらに会ったらぶっ飛ばす。会わなかったらそれでオッケーだ！］
まーそうなるよなー…臨機応変に対応するってことで。みんな俺のこと助けてね？お願いね？
［ま、しょーがないわね］
［任せろよブラザー！このジブラルタル様が守ってやる］
…ありがとう。
そんな会話をしていると、イッセーと会話を終えたアーシアさんが俺にスマホを返してきた。まだ通話中と表示されていたので、耳を当てる。

「どういう事になったんだ？」
『ああ、明日の昼、小猫ちゃんと俺がお前の家に行く。――部長は教会側には関わらない方が良いって言ってるけど、アーシアを放ってはおけない』
「ああ、分かった」
『…おい、操。アレってなんなんだ？もしかして、お前も――？』
「いや、俺は普通の人だ。――多分お前、人間じゃないんだろ？」
『――ッ！ああ、俺は――』
イッセーが息を呑み、震えた声で何かを話そうとする。しかし、俺はお構いなしに喋る。
「別にそこはどうでも良いんだよ。お前はお前だろーが。俺が言いたいのはな、なんで俺に詳しく説明しなかったんだって事だ」
『…それは』
「どーせ巻き込みたくないとか考えてくれてたんだろうけどな、こう、なんか…――はあ。もういいや、なんか言いたい事忘れちった」
『…悪い』
「おう、次こんな事あったらお前のエロコレクション全部燃やすからな」
『ええ!?お前それは無い――』
「じゃあねー」

明日の昼か…とりあえず目処は立ったみたいだ、良かった。
[おい聞いたか？ソウがデレたぞ…]
アーシアさんはとりあえず無事って事で。グレモリー先輩が少し心配だが、まあひどい事はしないだろう。
[デレたわね…]
[デレたな……]
アーシアさんが申し訳なさげに頭を下げる。その頭を俺は撫でて…なんて事は出来ずに、手を振って問題ないと言うことを示す。
[今のってデレるって感情なの？僕まだ分からないや！]
[ええ。アレはデレよ]

［デレてたねえ…］
はあ…。今日は色んなことがありすぎた…。ぐっ、と背を伸ばすと、ぽきぽきと小気味良い音が鳴る。
［甘えをあの小僧に見せたな］
［博士、それをデレって言うのよ］
［くだらんほどデレてたな］
［ええ。ものすごーくね？］
あー、疲れた。もう今日は寝るか…。アーシアさんも安心してか、また目を閉じそうになってるし。
［たしかにデレてたわね］
［ああ］
［はっは！かわいいじゃねえかブラザー！］
［??］
アーシアさんをベッドに寝かしつけ、俺はリビングのソファで寝る事にする。まあ、女の子を床やここに寝かせるわけには行かないからな。
…ふう。

「うるせえええええええええ!!!」

ソファに顔を埋めて叫んだ。力の限り叫んだ。俺をいじめて楽しいかよテメエら!?今日という今日は――!!
俺は顔の熱を誤魔化しながら長い長い説教を始めるのであった。

聖女と友達

『悪いイッセー。アーシアさんが俺の家から出て行った』
朝、操から電話がかかってきた。その電話の内容に俺は愕然とする。
…今アーシアを一人にしちゃいけねえ…！いつあの堕天使共が襲ってくるか…！
焦燥に駆られ、すぐにアーシアを探そうとすると、操が声を発した。
『――今アーシアさんはお前の家の近くの公園にいる。すまんが行ってやってくれ！――っ痛う…』
何故アーシアの場所が分かったのか疑問に思ったが、操の妙な神器を思い出す。そういう能力があると教えてもらった。小さな声で痛がっていたのはその副作用だろう。…また操に使わせちまった。
（でも今はアーシアだ。早く見つけないと…。）
俺はそう切り替え、アーシアがいる公園へと向かって行った。

「いってえ……」
『全能の目』を使用し、街全体を観た俺は涙を流しながら目元を抑える。やっぱり街全体はめちゃくちゃ痛い…。
［めちゃくちゃ焦ってたもんなあ］
めちゃくちゃ焦った…。アワアワしてたらブラハが指摘してくれてようやく動いたからなぁ…。
…アーシアさん、大丈夫かな。イッセーが迎えに行ったから問題ないとは思うが…。
［とりあえず、今は目を休めろ。行動するにも万全な状態でないと結果は残せない］
「はいよー」
そう返事をしてベッドに転がる。はあ…何か俺にも他に出来る事

ねえの？動けないなりにイッセーのサポートをできるような道具出してよレジェえもん～！…まあ、そんな都合の良いもんなんかあるわけ――。

［あるぞ］

「クリプトえもん!?」

「アーシア!!」

操が教えてくれた公園に行くと、そこにはベンチに座ったアーシアが居た。アーシアは俺の姿を見て目を丸くしていた。

「よかった無事で…」

「イッセーさん…、どうしてここが…？」

「操が教えてくれたんだ、ここに君がいるって」

ひとまず肩を撫で下ろす。堕天使の奴らとはまだ接触していないみたいだ。アーシアは叱られた子供のような表情をして、俺を見上げる。

「アーシア…どうして操の家から抜け出したんだ？」

「わ…私は…、迷惑をかけたくありませんでした…。私があの家に居ては、阿久須さんにも、そして阿久須さんの家族の方にも迷惑をかけてしまいます…！だから、だから…！」

「――そんなわけないだろ!!」

俺の大声に体を震わせるアーシア。怯えさせてしまったのはめちゃくちゃ罪悪感がある。でもこれだけは言わないといけなかった。

「迷惑だなんて操も、俺も！思うわけない！」

絶対に俺たちはアーシアと関わって迷惑などと思ったりしない。今操はこの場には居ないが、アイツも絶対にそういうだろう。長年の感ってやつだ。

「それに――アーシア、俺たちはもう友達だろ？友達は迷惑かけられるくらいが丁度いいんだよ」

その言葉に自分でもクサいと思ってしまい、頬に熱がたまるのを感じる。ポリポリと頭を掻いていると、急にアーシアが泣き始めた！

「うっ、ぐす…っ」

「ア、アーシア!?ご、ごめん言いすぎたかな!?」

「ち、違うんです…、わ、私…友達だなんて言われた事も無くって…それで…」

思わずプッ、と吹き出してしまう。そして今日の予定が今決まった。それは――

「アーシア、今日一日俺に付き合ってくれ」

「――？」

「友達同士、楽しく遊ぼう！」

――この子に、普通の日常を過ごして欲しい――！

「よく言ったイッセーその調子だ!!」

というワンシーンを俺は上からドローンで眺めてました。
…犯罪臭が漂っているが、これしかなかったんだよ。クリプトの能力はドローン。誰もが知っている遠隔操作できるアレだ。まあ、遠隔操作の他にもできる事はあるらしいんだが…。
まあそれはそれとして。アーシアさん良い子すぎるやろ…！本当に優しい子だ…！こう、守ってあげたくなる感じだ…！
［本格的にヤバくなってないかコイツ］
今日はもう良い！ここからずっとアーシアさんとイッセーを見てる！バケモン達も監視できるしな！（露骨な理由付け）
［それ、壊されるなよ。視覚と聴覚がイカれるぞ］
――何でお前らはデメリットを後で言うクセがあるの!?それ先言ってくれよ頼むからァ!!
急いでドローンを呼び戻す。流石にここで目と耳を無くすわけにはいかない。それにドローンで無茶するよりかは体の回復を待った方が良い。

「ってなると。一気に暇になっちまうなあ…。なんか無いのか、みんな？」
［うーん…今教えても面白くねえもんなあ…］
オイコラ。ぶっとばすぞウィット。それにお前のはもう教えてもらっただろーが。
「――じゃあ。アタシの能力を教えておこうかしら？きっと役に立つわ」
ローバ…、役に立つって、どう言う事だよ？
［さあ？ま、強いて言うなら――女のカンよ］